# 東洋美術大觀十二

# 東洋美術大観 十一

# 東洋美術大観第十一册

## 目次

明（承前）


| | |
|---|---|
| 張宇筆夏林清隱圖 | 一枚 |
| 沈周筆虚亭聽泉圖 | 二枚 |
| 同筆溪堂清齋圖 | 一枚 |
| 同筆疎林亂紅圖 | 一枚 |
| 文徵明筆江山村莊圖 | 一枚 |
| 李一白筆秋江遠寺圖 | 一枚 |
| 陸遠筆玉照觀梅圖 | 一枚 |
| 謝時臣筆寒山秋水圖 | 一枚 |
| 同筆江山無盡圖卷 | 二枚 |
| 闕思筆寒月煙樹圖 | 一枚 |
| 胡宗仁筆溪居讀書圖 | 一枚 |
| 喩希連筆松溪聽泉圖 | 一枚 |
| 米萬鍾筆溪山隱逸圖 | 一枚 |
| 董其昌筆横雲流水圖 | 一枚 |
| 同筆峯巒渾厚圖 | 一枚 |
| 吳焯筆松下觀瀑圖 | 一枚 |
| 王思任筆洞庭秋景圖 | 一枚 |
| 張瑞圖筆群峰百泉圖 | 一枚 |

同筆江崖蕭樹圖　一枚
同筆廬山瀑布圖　一枚
范景文筆五大夫圖　一枚
李流芳筆松下觀瀑圖　一枚
陳繼儒筆夏山煙雲圖　一枚
李郁筆秋雨山莊圖　一枚
倪元璐筆江山風帆圖　一枚
卞文瑜筆老松鳴鶴圖　一枚
袁尚統筆寒山晚歸圖　一枚
顧啓芳筆孤亭聽泉圖　一枚
盛茂燁筆遊山漁水圖　一枚
同筆埜花江燕圖　一枚
同筆元旦慶樂圖　一枚
張宏筆夏山欲雨圖　一枚
揚文驄筆江山孤亭圖　一枚
葛徵奇筆溪亭銷夏圖　一枚
盛紹先筆秋溪小亭圖　一枚
王建章筆玉華春洞圖　一枚
同筆飛泉喬松圖　一枚
同筆江山疎林圖　一枚
同筆桐林曳杖圖　一枚

陳紹英筆山莊蟠書圖　一枚
馬一卿筆山莊初秋圖　一枚
明河筆溪村秋色圖　一枚

清

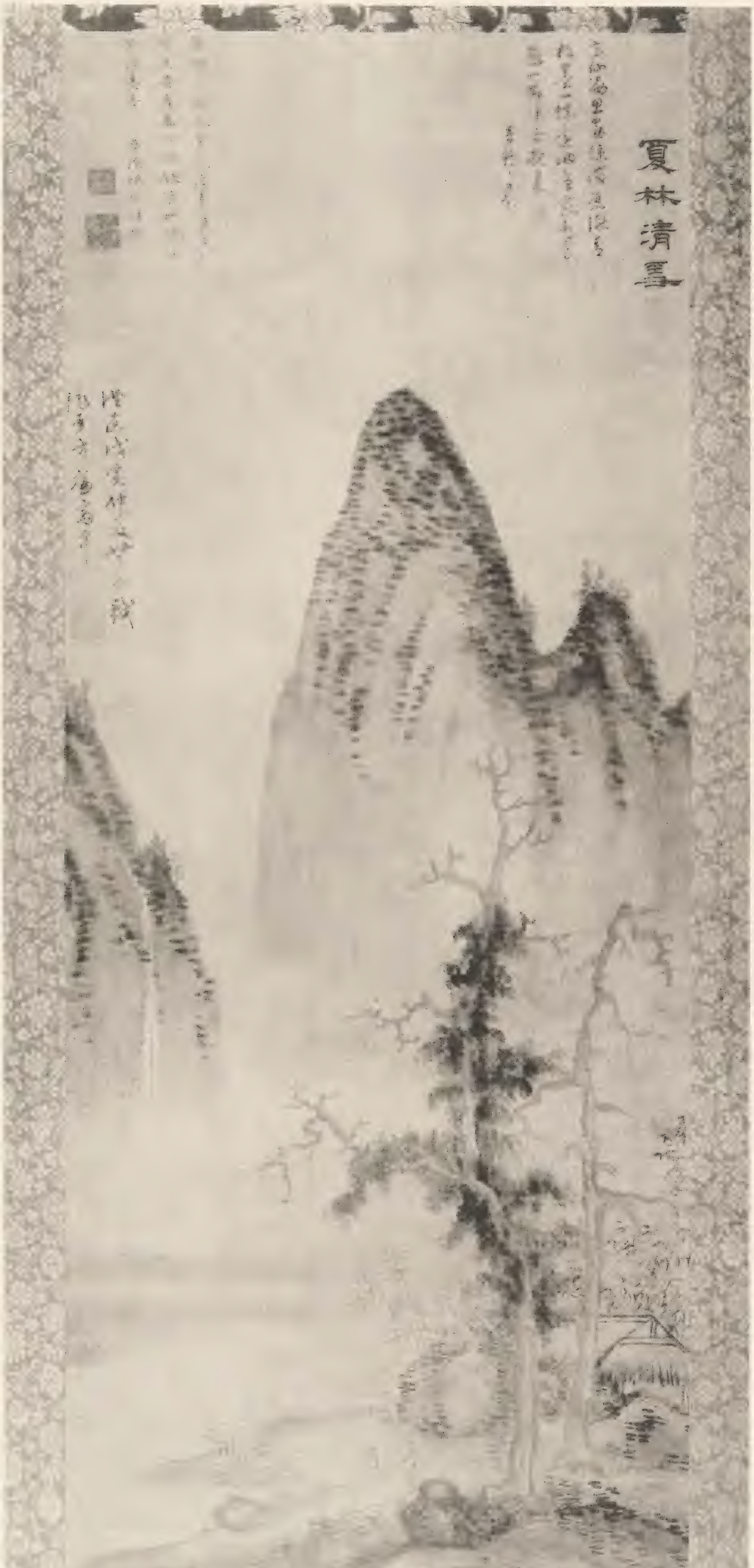
藍瑛筆雨後曉烟圖　一枚
同筆荷鄉清夏圖　一枚
同筆秋景尋詩圖　一枚
藍孟筆遊山漁樂圖　一枚
蘇誼筆雪山行旅圖　一枚
袁雪筆瓊樓玉亭圖　一枚
王時敏筆夏山飛閣圖　一枚
祁豸佳筆綠陰聽泉圖　一枚
同筆溪山孤亭圖　一枚
周之夔筆松澗孤亭圖　一枚
惲向筆高松瀑布圖　一枚
張風筆觀楓圖　二枚
道濟筆廬山遊覽圖　一枚
方大猷筆雲岫萬松圖　一枚
張學曾筆山寺綠陰圖　一枚
莊冋生筆蕭林詩人圖　一枚
林祁筆花卉圖　一枚

# 張宇筆夏林清隱圖

尾張津島　岡本清三君藏

紙本水墨縱四尺七寸、橫一尺八寸

無爲道人張宇の傳記は詳ならず、本圖の款識に依りて、明初洪武間の人なることを知り、併せてその吳派に屬する逸雅の畫風を觀ることを得、亦これ逸傳の一能手なり


夏林清暑

## 沈周筆廬亭聽泉圖

絹本淡彩、縱三尺九寸八分、横二尺一分

京都　桑名鐵城君藏

## 同筆溪堂清齋圖

絹本淡彩、縱四尺八寸四分、横二尺四寸五分

讃岐高松　鹽田與三郎君藏

## 同筆疎林亂紅圖

絹本淡彩、縱四尺六寸三分、横二尺三寸五分

子爵　大久保忠一君藏

沈周字は啓南、石田又白石翁と號す人石田先生と稱す、父恒吉、伯父貞吉共に詩書を能くせり周その家學を紹ぎ、幼より詩文に長け、墳典丘索よりして、百代雜家の言に及ぶまで、窺はざる所なし一切の世味嗜慕する所少く、たゞ時々山川を眺睇し、雲物を擥擷し、翰を灑ぎ詩を賦し、丹青に游びて以て自適す、唐宋の名流、上下千載、縱横百輩、兼總條貫せざるなく、殊に山水は董源、巨然、黄子久、梅花道人に於いて、尤出藍の美を擅にせり王元美その書を稱して國朝第一と云ひ、文徴明亦これに師事す風神蕭散、碧眼飄鬢、宛然神仙中の人の如く、文翰揮映、百年來これに過ぐる者なしと稱せらる少時作る所盈尺の小幅多く、歳四十以後始めて大幅を作り、粗枝大葉、草々にして成ると云ふ宣德二年に生れ、正德四年八十三歳にして卒す、著す所、客坐新聞石田詩鈔あり明代山水畫中の謂はゆる呉派は即ちこの人よりして興りぬと謂ふべし。

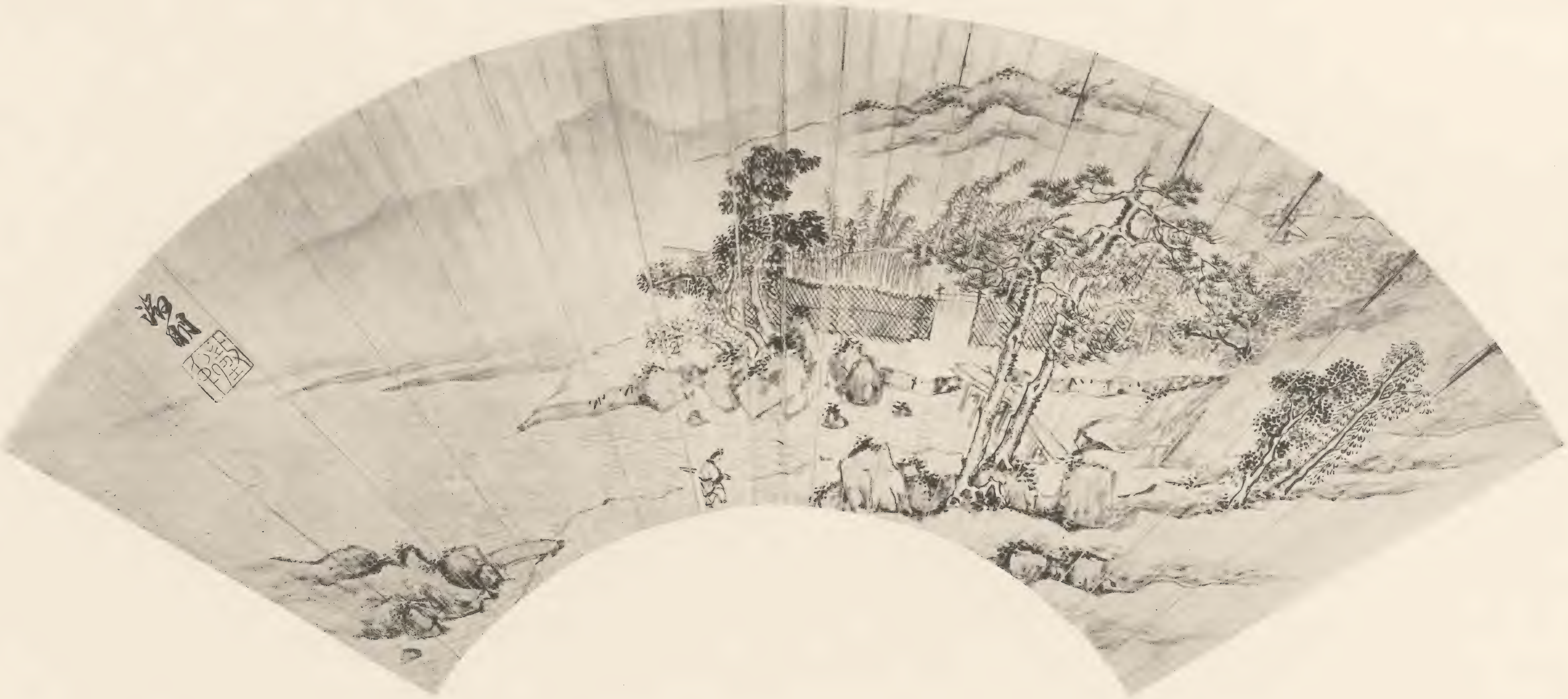
沈周

# 文徵明筆江山村莊圖

山城　黃檗山塔頭萬壽院藏

便面紙本水墨、縱五寸四分、橫上徑一尺七寸

文徵明初名壁、曩祖信國公の諱を避けて、字徵明を以て行はる、仍りて字を徵仲と更め、衡山と號す、長州の人なり成化六年を以て生る。諸生に補せられ、學問の傍頗韻事墨戯に耽る。その師友とする所、呉寛、李應禎、祝允明、唐寅、徐貞卿の徒、古文、詩歌或は書畫を以て一時の尤たらざるはなく、而も皆徵明に推讓せり。寧王宸濠その名を慕ひて、これを聘すれども、病を以て辭して赴かず。正德の末に至り、貢薦を以て翰林院待詔を授けられ、經筵に侍し、國史を修す。歲時の頒賜、他の詞臣に同じ、幾もなくして致仕し、翰墨を以てみづから樂む。名聲籍甚、四方の詩文書畫を乞ふ者踵を接し、門前市を爲す書生及故人、姻戚の強ゐるに遇へば、終日と雖倦まずして爲に毫を揮ふ。富貴の人車騎を連ねて至り、寶玩重幣を以て贈る者あれば、封を啓かずしてこれを還し、片楮だも敢て輕々しく許さず。暇あれば則近地の勝景に遊ぶ。到る所歡迎せられざるなし。會心の客來れば、焚香煮茗の間、水石を品し、古器を評し、書畫を談じて以て興を遣る。かくの如きもの三十餘年。文筆天下に徧し。嘉靖三十八年、壽九十にして卒す。死に臨みて尙人の爲に志石に書し、筆を停めて逝く。蝶の化するものゝ如し。人以て仙し去りて死せずと爲せり。南京國子監博士を贈られ、私謚して貞獻先生と云ふ。遺著甫田集あり。徵明諸技に長じたれど、中に就いて最妙を丹靑に得たり。その山水は宋の郭熙、董北苑、元の趙子昂、王叔明、黃子久の間に出入せり。その得意の所は最叔明に近く、且工緻を以て勝り、小品の作更に佳なるもの多かりきと云ふ。こゝに出す所の便面は黃檗第二代木庵和尚來朝の時將來せし遺愛に係り、その所創の萬壽院に寶襲せらるゝものなり。



# 李一白筆秋江遠寺圖

山城　黄檗山塔頭萬壽院藏

便面、紙本水墨、縱五寸七分、橫上徑一尺七寸九分

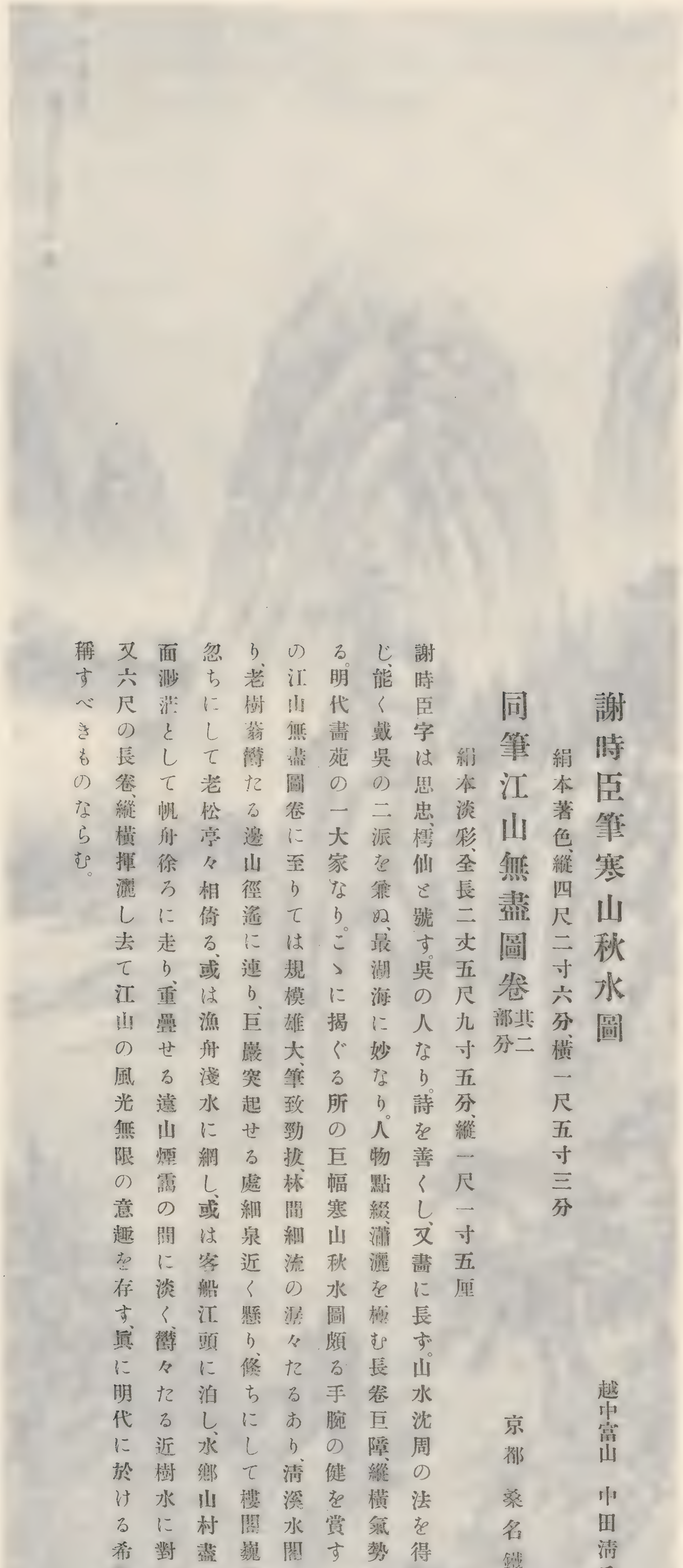
李一白は支那の畫傳これを逸して、如何なる人なるかを知るに由なし。然れども本圖亦前出文徵明江山村莊圖と共に木庵禪師將來にして、製作の年代略相如けりとおぼしければ、款記中の戊午の年は、嘉靖三十七年若くは萬曆四十六年なるべし。李一白は蓋し吳派の一名手ならむ。

# 陸遠筆玉照觀梅圖

絹本青綠縱四尺九寸橫一尺六寸五分

和泉　山本藤兵衛君藏

陸遠の傳は畫史に詳ならず。たゞ題名碑錄に依りて成化乃至嘉靖頃の進士たることを知るのみ。本圖を觀るに細麗の畫法、石田、徵明等の如き吳派と異なりと雖、亦これ南宗に屬すべきものとす。この畫もと奥藍田の舊藏にして、久しく玩賞家の間に推稱せられし名幅なり。



## 謝時臣筆寒山秋水圖

越中富山　中田清兵衛君藏

絹本著色、縱四尺二寸六分、横一尺五寸三分

## 同筆江山無盡圖卷其二部分

京都　桑名鐵城君藏

絹本淡彩、全長二丈五尺九寸五分、縱一尺一寸五厘

謝時臣字は思忠、樗仙と號す。呉の人なり。詩を善くし、又書に長ず。山水沈周の法を得て稍これを變じ、能く戴呉の二派を兼ぬ、最湖海に妙なり。人物點綴、瀟灑を極む長卷巨障、縱横氣勢ありと稱せらる。明代畫苑の一大家なり。こゝに掲ぐる所の巨幅寒山秋水圖頗る手腕の健を賞すべし。殊に後者の江山無盡圖卷に至りては規模雄大、筆致勁拔、林間細流の潺々たるあり、清溪水閣の瀟灑たるあり、老樹蓊鬱たる邊山徑遙に連り、巨巖突起せる處細泉近く懸り、倏ちにして樓閣巍然江水に瀕み、忽ちにして老松亭々相倚る、或は漁舟淺水に網し、或は客船江頭に泊し、水鄉山村盡くるところ江面渺茫として帆舟徐ろに走り、重疊せる遠山煙靄の間に淡く、鬱々たる近樹水に對して靑し。二十又六尺の長卷、縱横揮灑し去て江山の風光無限の意趣を存す、眞に明代に於ける希覯の大傑作と稱すべきものならむ。

耕すへきものならむ。

又六尺の長卷に細描精寫して江山の風景無限の意趣を寫す。實に明代に於ける本圖の大[illegible]こ

而も描法として南北兩派を併せるに走り、重疊せる遠山煙靄の間に淡く靄かゝれる近樹木に擬して[illegible]し二十

[illegible]

[illegible]

[illegible]江山[illegible]

る。明代畫苑の一大家なり。こゝに掲ぐる所の巨幅寒山林木圖頗る手腕の[illegible]を發揮し、殊に[illegible]

し、能く戴吳の二派を兼ね、最も澗落に妙なり。人物點綴[illegible]

[illegible]字は思忠[illegible]の人なり。畫を善くし又[illegible]山水[illegible]

絹本淡彩全長二丈五尺九寸五分幅一尺一寸五厘

同筆江山無盡圖卷 部分 其二　　東京 [illegible]藏

絹本著色縱四尺二寸六分橫一尺五寸三分

[illegible]筆寒山林木圖　　越中富山 中田清兵衞君藏

雲壑飛泉
樗仙謝時臣寫景

# 關思筆寒月煙樹圖

男爵　岩崎小彌太君藏

絹本淡彩、縱四尺八寸、横一尺五寸八分

關思字は何思、一の名は九思字は仲通、虛白と號す。烏程の人なり。萬曆の間、名海内に重し。骨法氣韻、二李三王の徽に入ると稱せらる。本圖崇禎三年の作、明末一名手の妙趣を賞するに足れり。

夜中看
崇禎三年九月望
倣李希筆
關思

# 胡宗仁筆溪居讀書圖

尾張小鈴谷　盛田久左衛門君藏

金箋淡彩、縦四尺五寸、横一尺一寸三分

胡宗仁字は彭擧、長白と號す。上元の人なり。冶城山下に隱居す。雲林、叔明、子久等を慕ひて、頗五代以前の氣象あり。墨竹烟飛び水滴る意あり。亦詩に工なりきと云ふ。宗仁の弟宗信、宗智亦共に丹青を以て著る。然れども宗仁の畵最脱俗の譽あり。宗仁生卒の年曆を詳にせずと雖、その子耀昆、起昆及宗智の子玉昆、士昆は皆清初の人にして、且宗仁は魏之璜、之克兄弟と相先後せる明末の作者なれば、本圖款識の辛丑は、必や萬曆二十九年ならむ。巧密の畵風、蓋し最叔明に得る所ありしなるべし。

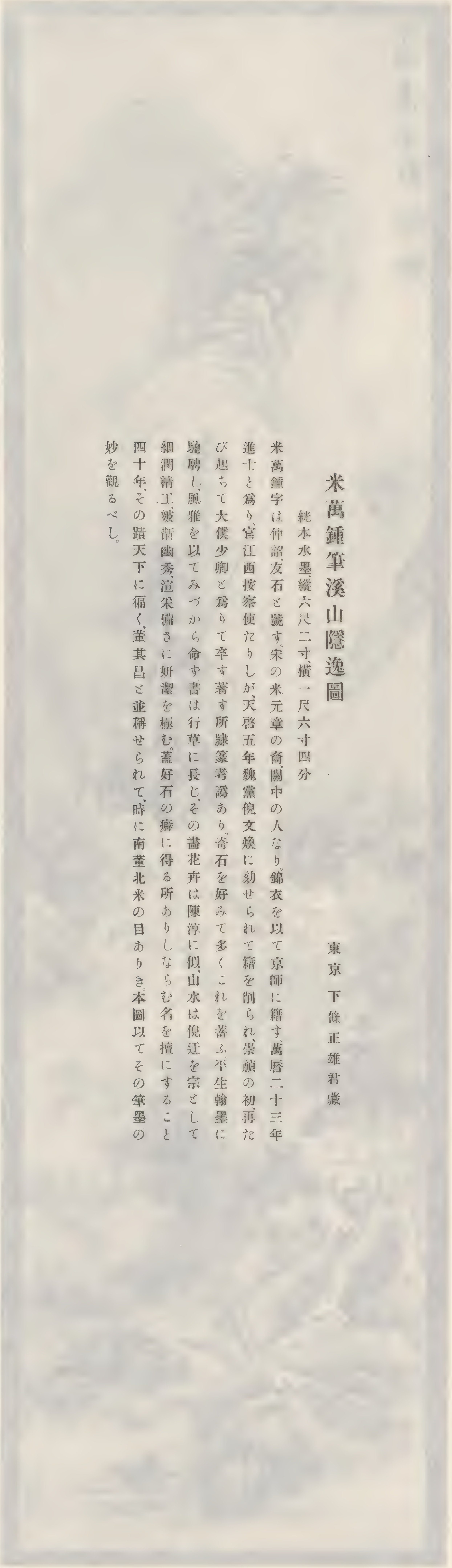
辛丑夏日宗作畫

# 喩希連筆松溪聽泉圖

子爵　秋元興朝君藏

絹本淡彩、縱五尺九寸九分、橫二尺六寸一分

喩希連字は魯望、素癡と號す。江西玉山の人なり。萬曆中京師に遊ぶ、莊老の學を慕ひ、兼ねて佛典に通せり。その畫山水沈石田を法とし、十步の外より遠く觀るも、亦巖岫の蒼鬱を覺ゆと云ふ。本圖亦石田に臨せるものなりと雖、又別に一家の機軸を出せり。



# 米萬鍾筆溪山隱逸圖

絖本水墨、縱六尺二寸、橫一尺六寸四分

東京 下條正雄君藏

米萬鍾字は仲詔、友石と號す。宋の米元章の裔、關中の人なり。錦衣を以て京師に籍す。萬曆二十三年進士と爲り、官江西按察使たりしが、天啓五年魏黨倪文煥に劾せられて籍を削られ、崇禎の初、再たび起ちて大僕少卿と爲りて卒す。著す所隷篆考譌あり。奇石を好みて多くこれを蓄ふ。平生翰墨に馳騁し、風雅を以てみづから命ず。書は行草に長じ、その畵花卉は陳淳に似、山水は倪迂を宗として細潤精工、皴皵幽秀、渲采備さに妍潔を極む。蓋好石の癖に得る所ありしならむ。名を擅にすること四十年、その蹟天下に徧く、董其昌と並稱せられて、時に南董北米の目ありき。本圖以てその筆墨の妙を觀るべし。

# 董其昌筆横雲流水圖

絹本水墨、縱三尺四寸八分、横一尺八寸

東京 永井喜炳君藏

# 同筆峯巒渾厚圖

絹本淡彩、縱三尺二寸五分、横九寸一分五厘

大阪 西松喬君藏

董其昌字は玄宰、思白と號す。華亭の人なり。嘉靖三十四年に生れ、萬暦十七年進士と爲りて詞垣に入り、崇禎中禮部尚書に晉む。詩文書畫善くせざる所なく、山水樹石、煙雲流潤、神氣充足、出すに儒雅の筆を以てし、風流温籍、當時第一たり。みづから言ふ。その畫文太史と較々長短あり。文の精工は吾の如かざる所なりと。書は平原、吳興を法とし、みづから一家を成す。文雅の名日に益々重く、四方文を徵する者愈々多く、碑碣銘誌の類、その筆に非ざれば重せられず高麗、琉球亦皆知りてこれを寶とす斷楮殘煤、聲價百倍す。年大耋に近くして、猶手に卷を釋てず。燈下蠅頭書を讀み、蠅頭字を寫す。蓋化工手に在り、烟雲供養す。故に神明衰へざるなり。崇禎九年壽八十二にして卒す。詔して太子大傅を贈り文敏と諡せらる。著す所萬暦事實纂要、南京翰林志、容臺集、畫禪室隨筆あり。又嘗て詔を奉じて神宗實錄三百卷を編せり。山水、南北二宗の別は、實にこの人に依りて首唱せられ、終に天下の通論と爲りしなり。無聲詩史董其昌の畫を評して曰く「仿北苑、巨然、千里、松雪、大癡、山樵、雲林、精研六法、結嶽融川、筆與神合、氣韻生動、得於自然、所謂雲峰石迹、迥出天機、筆意縱横、參乎造化者也」。盛名の下、虛士なし。こゝに掲ぐる所、以てその妙を賞するに足る。

し、こゝに掲ぐる所以てその趣を賞するに足る。

[illegible]

の筆を以てし、風流[illegible]當時第一たりしかも言ふ、その畫文太史と[illegible]、長短あり、文の精工は吾の

人[illegible]

董其昌字は玄宰、思白と號す。華亭の人なり。萬曆三十四年に生れ、萬曆十七年進士と爲りて[illegible]に

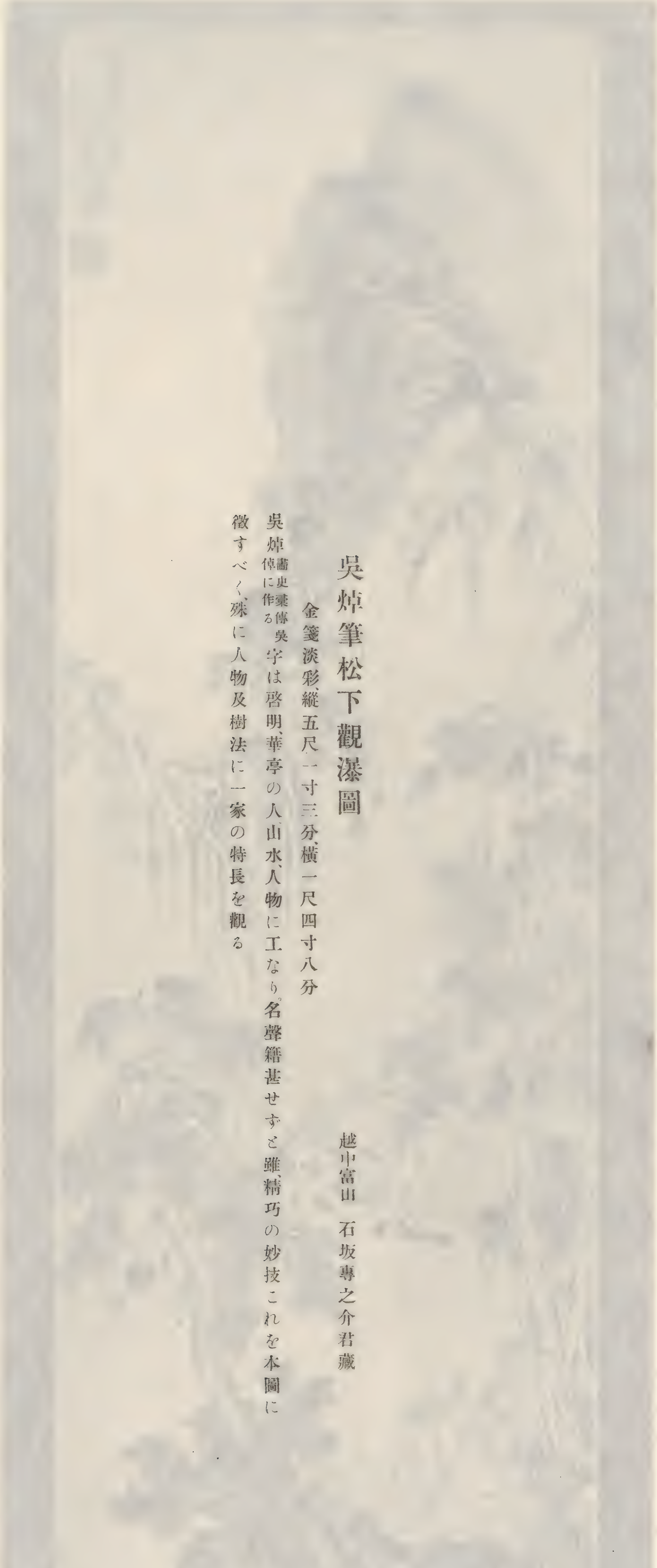
絹本淡彩、縦三尺二寸五分、横九寸一分五厘

同[illegible]圖　大阪 [illegible] 藏

絹本水墨、縦三尺四十八分、横一尺八寸

董其昌[illegible]雲[illegible]水圖　東京 [illegible] 藏

横雲嶺外千重
樹流水聲中一萬
家
玄宰



# 吳焯筆松下觀瀑圖

越中富山　石坂專之介君藏

金箋淡彩、縱五尺一寸三分、横一尺四寸八分

吳焯（畫史彙傳吳倬に作る）字は啓明、華亭の人、山水、人物に工なり。名聲籍甚せずと雖、精巧の妙技これを本圖に徵すべく、殊に人物及樹法に一家の特長を觀る

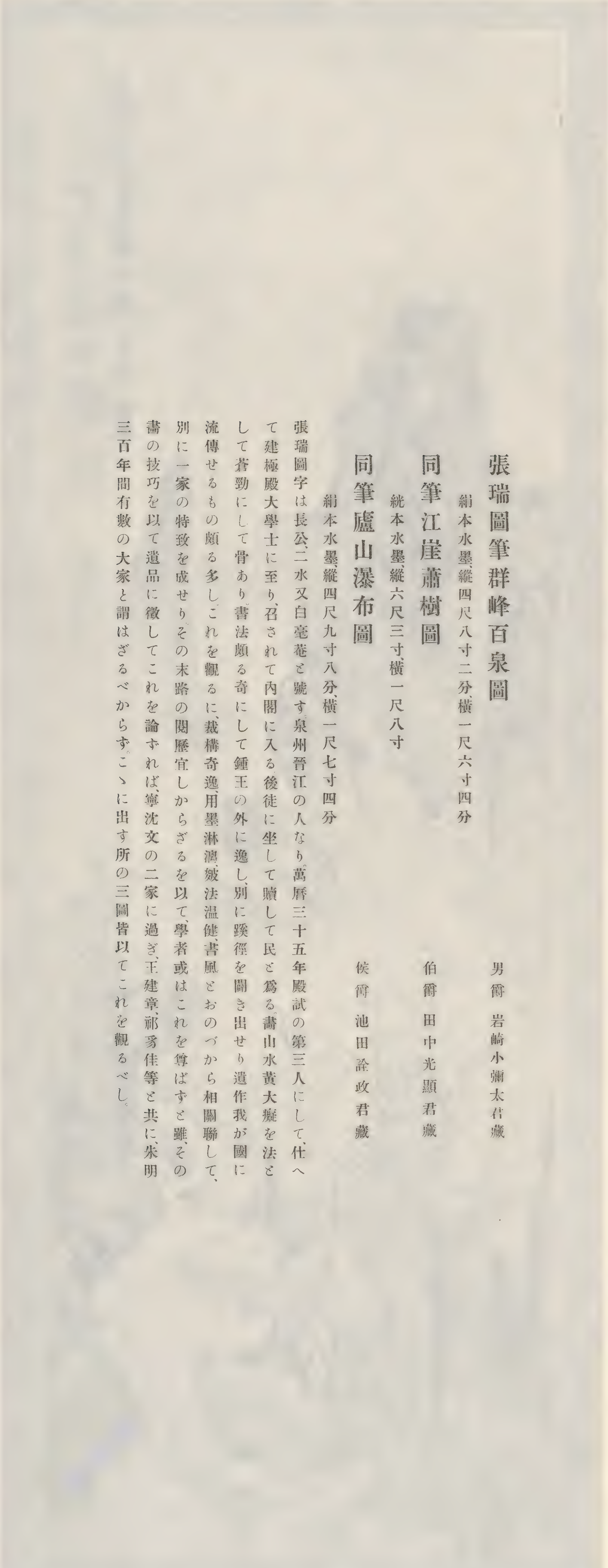
# 王思任筆洞庭秋景圖

男爵　岩崎小彌太君藏

絖本水墨、縱五尺一寸四分、横一尺六寸九分

王思任字は季重、遂東と號す。山陰の人なり。萬曆二十三年の進士にして、官禮部右侍郎に至る。古文詞及書を善くし、董其昌陳繼儒と相伯仲す。その畫米家の數點雲林の一抹に倣ひて雅致に富めりと云ふ。本圖は崇禎二年の作にして、蕭疎簡逸の趣、頗雲林の旨を得たり。

崇禎己巳六月二日為



## 張瑞圖筆群峰百泉圖

絹本水墨、縱四尺八寸二分、横一尺六寸四分

男爵　岩崎小彌太君藏

## 同筆江崖蕭樹圖

絖本水墨、縱六尺三寸、横一尺八寸

伯爵　田中光顯君藏

## 同筆廬山瀑布圖

絹本水墨、縱四尺九寸八分、横一尺七寸四分

侯爵　池田詮政君藏

張瑞圖字は長公、二水又白毫菴と號す、泉州晉江の人なり、萬曆三十五年殿試の第三人にして、仕へて建極殿大學士に至り、召されて內閣に入る、後徒に坐して贖して民と爲る、畫山水黃大癡を法として蒼勁にして骨あり、書法頗る奇にして鍾王の外に逸し、別に蹊徑を闢き出せり、遺作我が國に流傳せるもの頗る多し、これを觀るに、裁構奇逸、用墨淋漓、皴法温健、書風とおのづから相關聯して、別に一家の特致を成せり、その末路の閱歷宜しからざるを以て、學者或はこれを尊ばずと雖、その畫の技巧を以て遺品に徵してこれを論ずれば、寧沈文の二家に過ぎ、王建章、祁豸佳等と共に、朱明三百年間有數の大家と謂はざるべからず、こゝに出す所の三圖皆以てこれを觀るべし。

三百年間行數の大家と謂はざるべからずこゝに掲ぐる所の三圖皆以てこれが證るべし [illegible]

[illegible]

同筆廬山瀑布圖

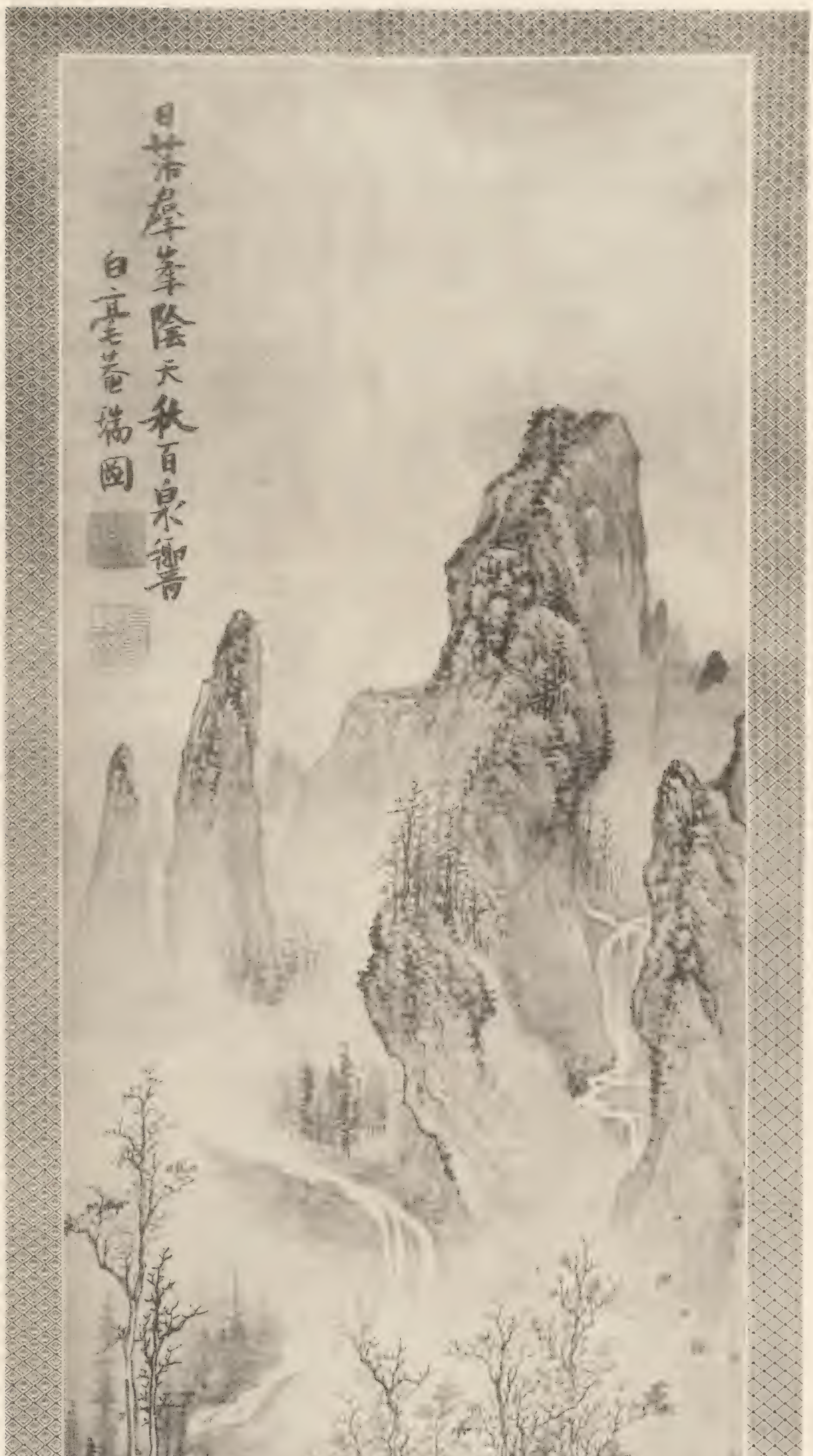
紙本水墨竪六尺三寸横一尺八寸

同筆江上[illegible]圖

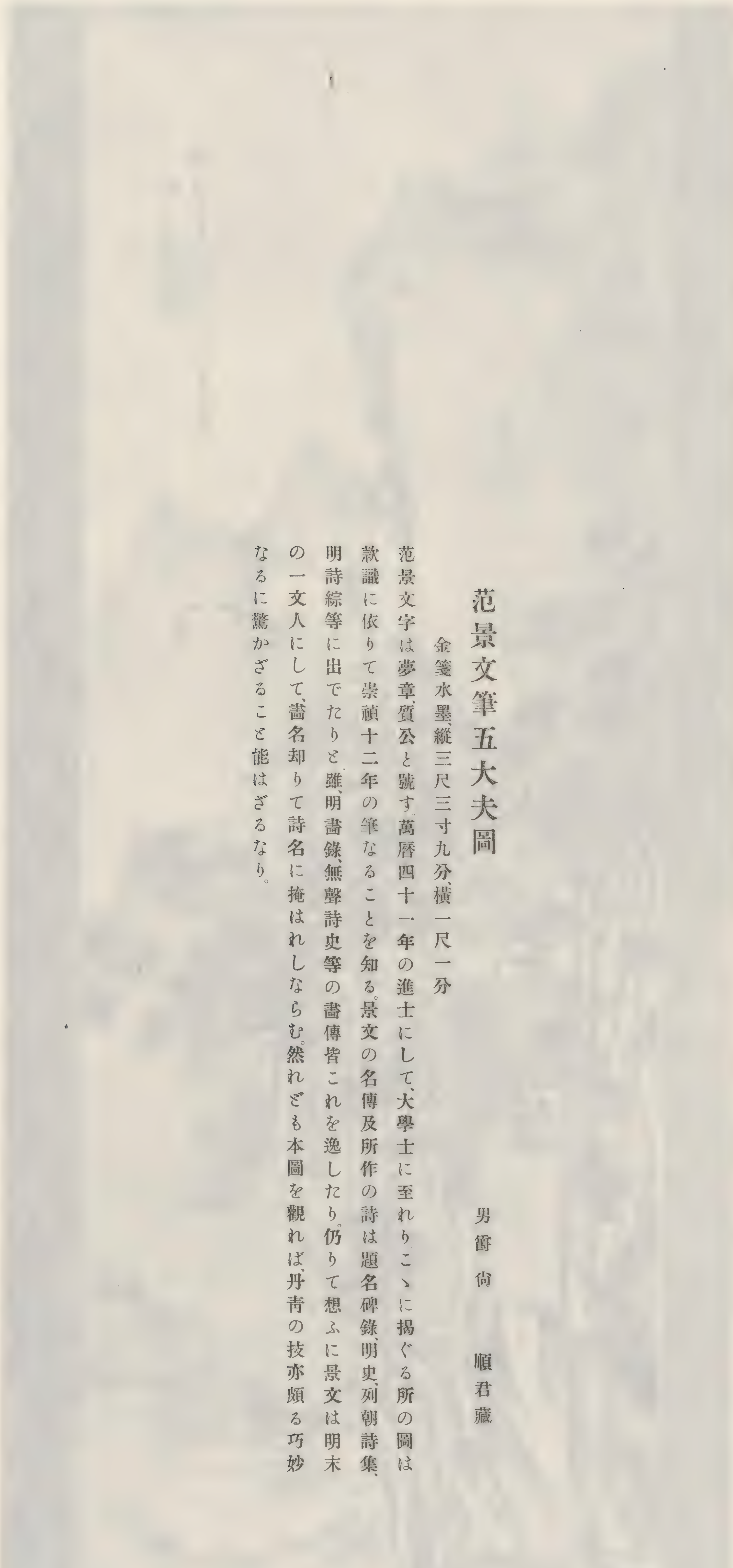
絹本水墨竪四尺八寸二分横一尺六寸四分

[illegible]白衆圖

[illegible]


日落羣峯陰天秋百泉響

崇禎丙子秋孟



# 范景文筆五大夫圖

男爵尚順君藏

金箋水墨縱三尺三寸九分橫一尺一分

范景文字は夢章、質公と號す萬暦四十一年の進士にして、大學士に至れりこゝに揭ぐる所の圖は款識に依りて崇禎十二年の筆なることを知る。景文の名傳及所作の詩は題名碑錄、明史列朝詩集、明詩綜等に出でたりと雖、明書錄、無聲詩史等の書傳皆これを逸したり。仍りて想ふに景文は明末の一文人にして、書名却りて詩名に掩はれしならむ。然れども本圖を観れば、丹青の技亦頗る巧妙なるに驚かざること能はざるなり。

己卯春日寫五大夫意 景文贈
於大定寺丈室

# 李流芳筆松下観瀑圖

播磨明石　米澤吉次郎君藏

金箋水墨、縱四尺六寸五分、橫一尺二寸六分

李流芳字は長蘅、檀園と號す。嘉定の人にして常熟に居る、萬暦三年に生れ、同三十四年孝廉に擧げられ、再たび公車に上る。然れども意を進取に絶ちて、詩書書篆に悠遊する人と爲り孝友誠信。友と交はるに落々穆々、深くその失を咎めず。却りて身を傾けてこれが爲に周旋し、敢て患難を避けず家貧しと雖、善くその母に奉じ、稍贏れば則ち分ちて窮交寒士に給す世の崖岸みづから矜重する者を視ては、唾してこれを棄てむと欲せり。その詩文の品致は士林の翹楚と爲り、書は東坡を法とす。同時何雪漁篆刻を以て世に稱せられしが、流芳戯にこれに倣ひて、遂に並稱せらる眞にその性の敏にして多能なる者なり。崇禎二年壽五十五にして卒す。遺著檀園集あり。その書大いに世に重せらる評者曰く「山水清標映發、墨瀋淋漓、出入宋元、逸氣飛動」（書史彙傳）又曰く「名士風流、宛然筆墨之外」本圖以てその槪を觀るべし。

乙丑秋日寫

# 陳繼儒筆夏山煙雲圖

東京　高安紫山君藏

絹本水墨、縱三尺六寸、横一尺八寸四分

陳繼儒字は仲醇、麋公又眉公と號す。華亭の人なり。少にして讀書を好み、詩歌文辭に長じ、子史百家精討せざるなく頃刻にして萬言を成す。晩に緇衣、黃冠の學を好む。歲二十一にして諸生に補せられ、二十八にして棄て去り、茆を小昆山の陽に結び、脩竹白雲、焚香晏坐、堅臥して起たず。その間に豁如たり。善く水墨の梅花、水仙、山水、奇石を寫す。氣韻空遠人意の表に出づ。書は蘇米の間に在り。詩文は短翰小詞と雖、皆風致を極む。一世斯文の宗匠たり。嘉靖三十七年に生れ、崇禎十二年壽八十二にして卒す。著詩文集等あり。本圖はその遺作の名什にして、筆墨の妙趣、寧前出沈文董の三家に勝れりと謂ふべし。

## 李郁筆秋雨山莊圖

絹本水墨、縱五尺、橫一尺七寸五分

京都　桑名鐵城君藏

李郁は鳳陽の指揮にして、崇禎十二年國難に殉せる人なり。されば本圖款記の戊午は萬曆四十六年なるべし。その名畫傳に著れずと雖、その蹟日東に存じて、以てこの人の能畫を知る。

# 倪元璐筆江山風帆圖

男爵 岩崎小彌太君藏

絖本水墨、縱三尺九寸七分、横一尺六寸八分

倪元璐字は玉汝、鴻寶と號す。上虞の人なり。天啓二年の進士にして詞林に入り、崇禎の末、戶部尙書に晉む。數、疏を上りて淸議爲に漸く明なり。崇禎十六年李自成の京師を陷るゝや、衣冠を整へて縊れて死す。福王贈るに少保吏部尙書を以てし、文正と謚す。著詩文集等あり。詩文世に重ぜられ、又行草書を善くし、兼ねて畫に長ぜり。竹石、水雲、山草、蒼潤古雅頗別致ありと稱せらる。本圖解索の亂皴、巧ならずして却りて雅、山容、樹姿、遠景、風帆、布局甚佳なり。忠烈なる高士の文心の餘緒、賞すべく、又敬すべきなり。

# 卞文瑜筆老松鳴鶴圖

讃岐高松　十河權三郎君藏

金箋水墨、縱一尺五分橫一尺三分

卞文瑜字は潤甫、浮白と號す。長洲の人なり。平生定居なく、爐香茗椀到る處おのづから隨ふ。山水小景一家の法に局せず、樹石勾剔、甚筆意ありと稱せらる。本圖以てその技風の一斑を賞すべし。

癸酉冬日寫
宋之繪

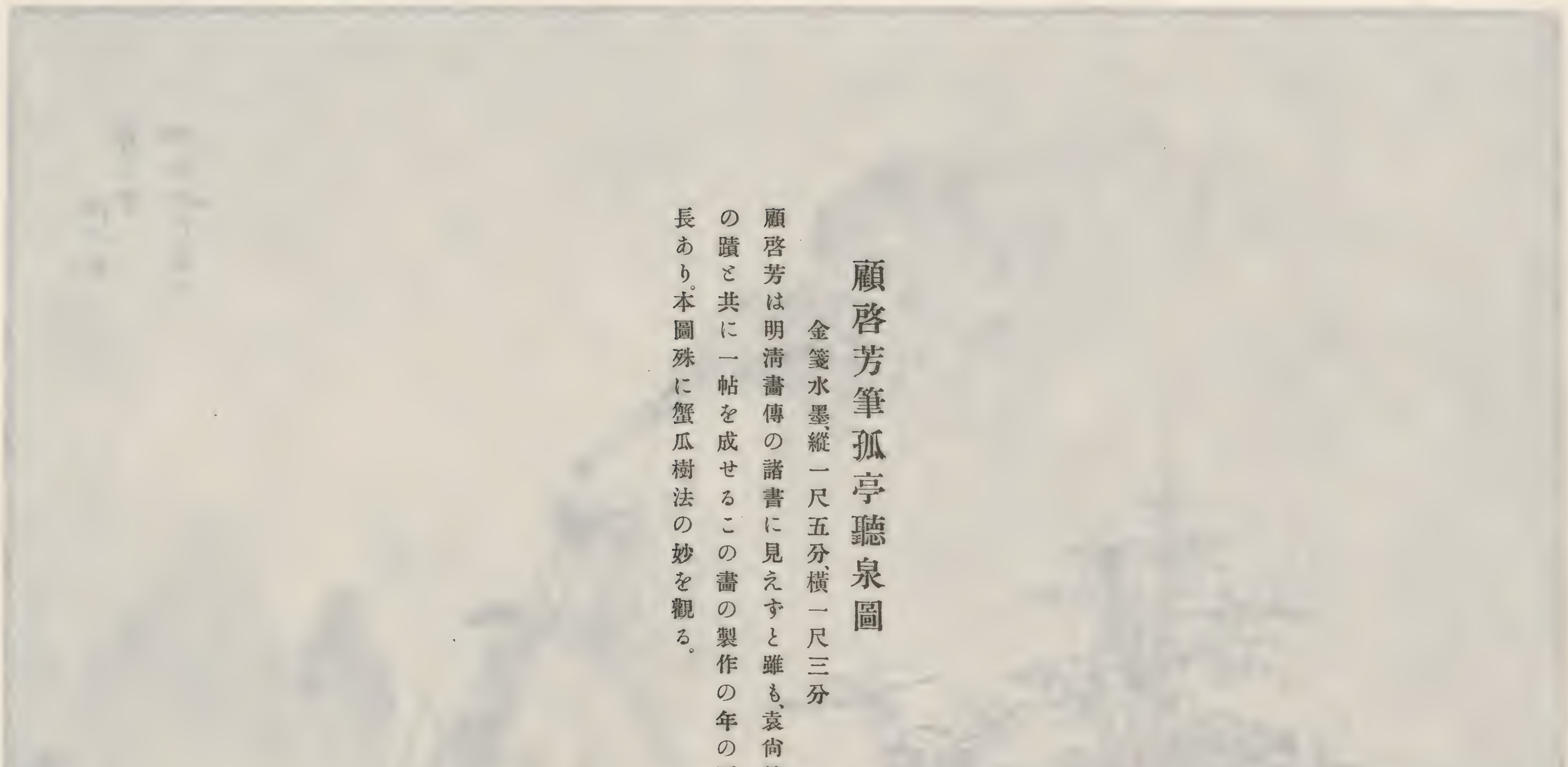
## 袁尙統筆寒山晩歸圖

金箋水墨、縱一尺五分横一尺三分

讃岐高松　十河權三郎君藏

袁尙統字は叔明、吳の人なり。山水渾厚、人物野放、頗宋人の筆意を得たりと稱す。本圖渴筆烘染の皴法及寒林の樹法、別に一家の妙趣あり。

癸酉仲冬寫于
竹深處
袁尚統



# 顧啓芳筆孤亭聽泉圖

金箋水墨、縦一尺五分、横一尺三分　讃岐高松　十河權三郎君藏

顧啓芳は明淸畫傳の諸書に見えずと雖も、袁尙統卞文瑜等と同時の人なりけむことは、前出二家の蹟と共に一帖を成せることこの畫の製作の年の干支を同うするにて察せらる。畫風別に一家の特長あり。本圖殊に蟹爪樹法の妙を觀る。

異あり，本圖頭に董其昌の跋字題る，

の讃と共に一幅を成せるこの畫の製作の年の干支を同うするにて察せらる，畫風別に一家の特

顧容芳は明淸畫傳の諸書に見えずと雖も，袁尙統，卞文瑜等と同時の人なりけむことは，前出二家

金箋水墨畫　竪一尺五分　横一尺三分

# 顧容芳筆孤亭聽泉圖

[illegible]

癸酉冬日寫于
寧遠堂
顧啓芳

## 盛茂燁筆遊山漁水圖

金箋淡彩、縦四尺一寸九分、横一尺六分　　男爵 郷 誠之助君藏

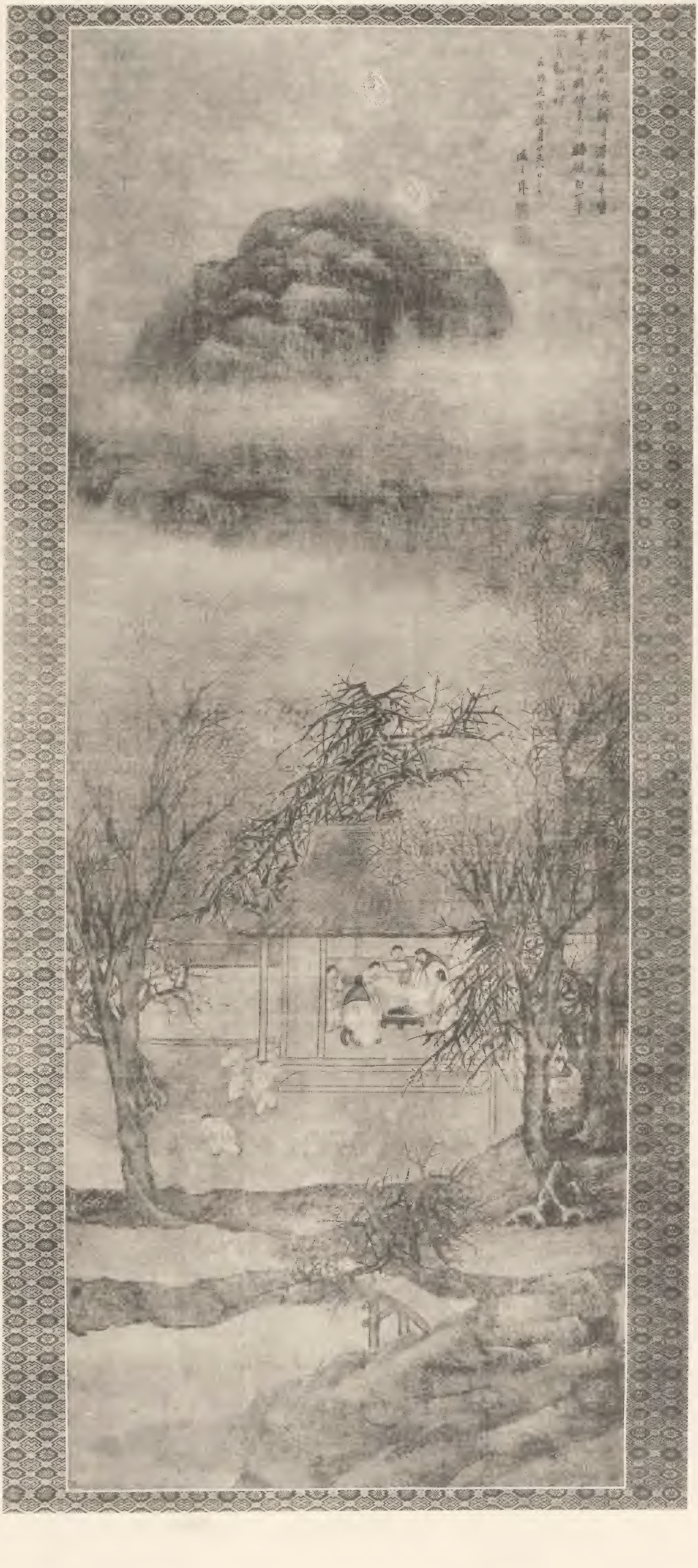
## 同筆埜花江燕圖

絹本淡彩、縦二尺六寸六分、横一尺一寸一分　　東京 下條正雄君藏

## 同筆元旦慶樂圖

絹本著色、縦六尺一寸三分、横二尺三寸五分　　男爵 岩崎久彌君藏

盛茂燁念菴と號す、又研菴に作る長州の人なり山水布景設色、烟林清曠の概を具し、人物亦精工典雅、筆意頗士氣あり。こゝに揭ぐる所の三圖は即その山水、人物の兩科に於ける好作例なり、元旦慶樂圖は天啓六年の作にして埜花江燕圖は崇禎十年の作なれば、以て茂燁が亦明末の人なることを知る。

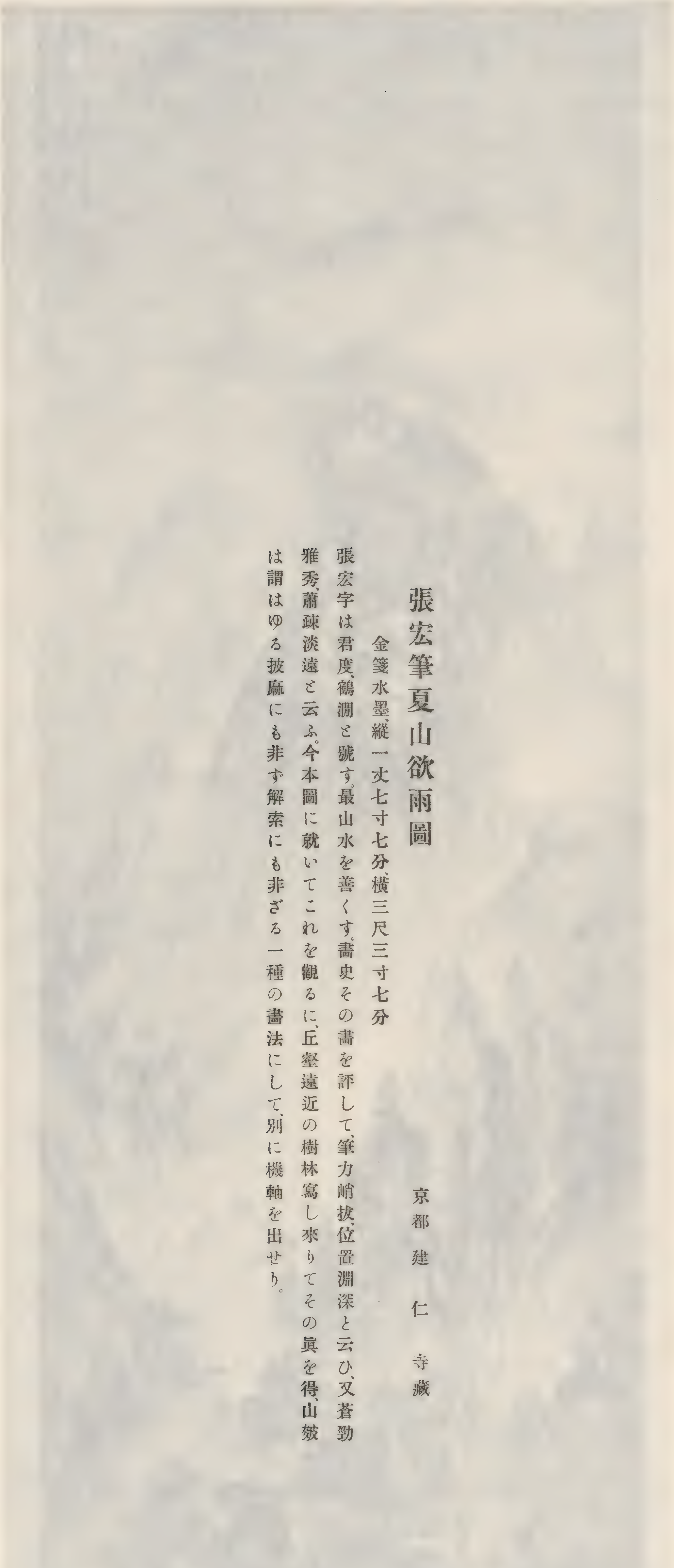


京都建仁寺藏

# 張宏筆夏山欲雨圖

金箋水墨、縱一丈七寸七分、横三尺三寸七分

張宏字は君度、鶴澗と號す。最山水を善くす。畫史その畫を評して、筆力峭拔、位置淵深と云ひ、又蒼勁雅秀、蕭疎淡遠と云ふ。今本圖に就いてこれを觀るに、丘壑遠近の樹林寫し來りてその眞を得、山皴は謂はゆる披麻にも非ず解索にも非ざる一種の畫法にして、別に機軸を出せり。



天啓丙寅重陽月寫夏山欲雨倣
董北苑法 張宏

# 楊文驄筆江山孤亭圖

大阪　岩本榮之助君藏

絖本水墨、縱三尺七寸三分、横一尺七寸六分

楊文驄字は龍友、貴州の人なり。金陵に流寓せしが、萬曆の末年、鄕薦に由りて官に仕へ、兵部郎と爲る。人と爲り、豪俠みづから喜び、頗名士を推奬す。士亦これを以てこれに附く。淸の順治三年、明の唐王福州に自立して帝を稱す。文驄義を以てこれを援く。七月淸兵至り、追騎の爲に獲られ、降らずして終に戮せらる。博學好古、文藻あり。書を能くし、又山水に長ず。容臺集にその書を品第して、宋人の骨力ありてその結を去り、元人の風雅ありてその佻を去り、巨然、惠崇の間に出入すと曰へり。本圖はその款記に由りて、崇禎十六年の作なることを知る。この幅もと山本梅逸の舊藏たり。賴山陽、中林竹洞、篠崎小竹、僧雲華等名士の跋甚多く、一時藝苑に喧傳せられて著名の珍品たり。梅逸の歿後、美濃の人某の有に歸し、爾來美濃の楊文驄として、翰墨界に名高かりき。これ蓋明末の國難に忠死せる文驄が崇高なる人格、後人をしてこの書に對する尊敬を厚からしめしにも因れるなり。圖上みづから題して、石田の墨意に倣ひて草筆野逸の致を極むと言ふ。而も健拔寧石田に過ぎたり。

男爵　岩崎小彌太君藏

# 葛徽奇筆溪亭銷夏圖

絖本水墨、縱六尺二寸四分橫一尺七寸六分

葛徽奇字は無奇、海寧の人、崇禎元年の進士なり。善く山水を寫す。亦明末の一妙手なり。本圖以てその清新なる技風を觀るべし。

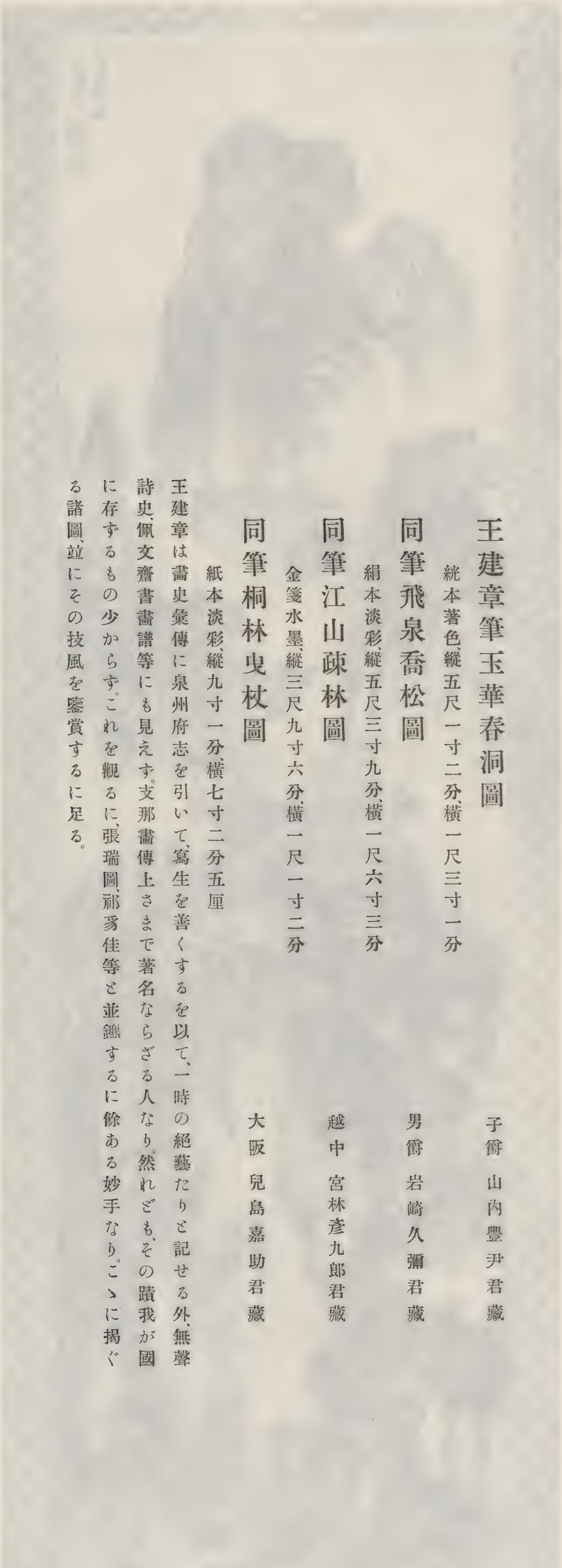
# 盛紹先筆秋溪小亭圖

京都　市田文次郎君藏

絹本水墨、縱五尺九寸二分、橫一尺六寸五分

盛紹先字は克振、楊州の人なりその名書傳に高からずと雖、今本圖を觀るに、半截の主山頂脚を併露して巧妙なる脈絡を爲し、低く小泉を懸けて落石趣を添え、中景斜に石磯を橫たへて裁構の宜しきを得、鋭筆斜擦の皴法、能く石の三面を現し、點苔亦頗その處を得たり亦明代の一妙手とす。

龍形小亭盡日無人到相伴垂楊
色尚青
師高房山法



## 王建章筆玉華春洞圖　子爵 山内豐尹君藏

絖本著色、縱五尺一寸二分、横一尺三寸一分

## 同筆飛泉喬松圖　男爵 岩崎久彌君藏

絹本淡彩、縱五尺三寸九分、横一尺六寸三分

## 同筆江山疎林圖　越中 宮林彦九郎君藏

金箋水墨、縱三尺九寸六分、横一尺一寸二分

## 同筆桐林曳杖圖　大阪 兒島嘉助君藏

紙本淡彩、縱九寸一分、横七寸二分五厘

王建章は畫史彙傳に泉州府志を引いて、寫生を善くするを以て、一時の絶藝たりと記せる外、無聲詩史、佩文齋書畫譜等にも見えず。支那畫傳上さまで著名ならざる人なり。然れども、その蹟我が國に存するもの少からず。これを觀るに、張瑞圖、祁豸佳等と並鑣するに餘ある妙手なり。こゝに揭ぐる諸圖、竝にその技風を鑒賞するに足る。

る畫圖題するの技倆を發揮するに足る

に存するもの少からずこれを觀るに、張瑞圖、邢侗、[illegible]等と並稱するに價ある妙手なりこゝに掲ぐ

[illegible]にも見えず、[illegible]にも未だ著名ならざる人なり、然れども其の筆の精絕なる[illegible]

王建章は畫史[illegible]に泉州府志を引いて、寫生を善くするを以て、一時の絕藝たりと記せる外、無[illegible]

絹本墨畫 縱九寸一分 横七寸二分五厘

## 同筆 桐林史杖圖

大阪 [illegible]君藏

金箋本墨畫 縱三尺九寸六分 横一尺一寸二分

## 同筆 江山[illegible]林圖

東京 [illegible]君藏

絹本淡彩 縱五尺三寸九分 横一尺六寸三分

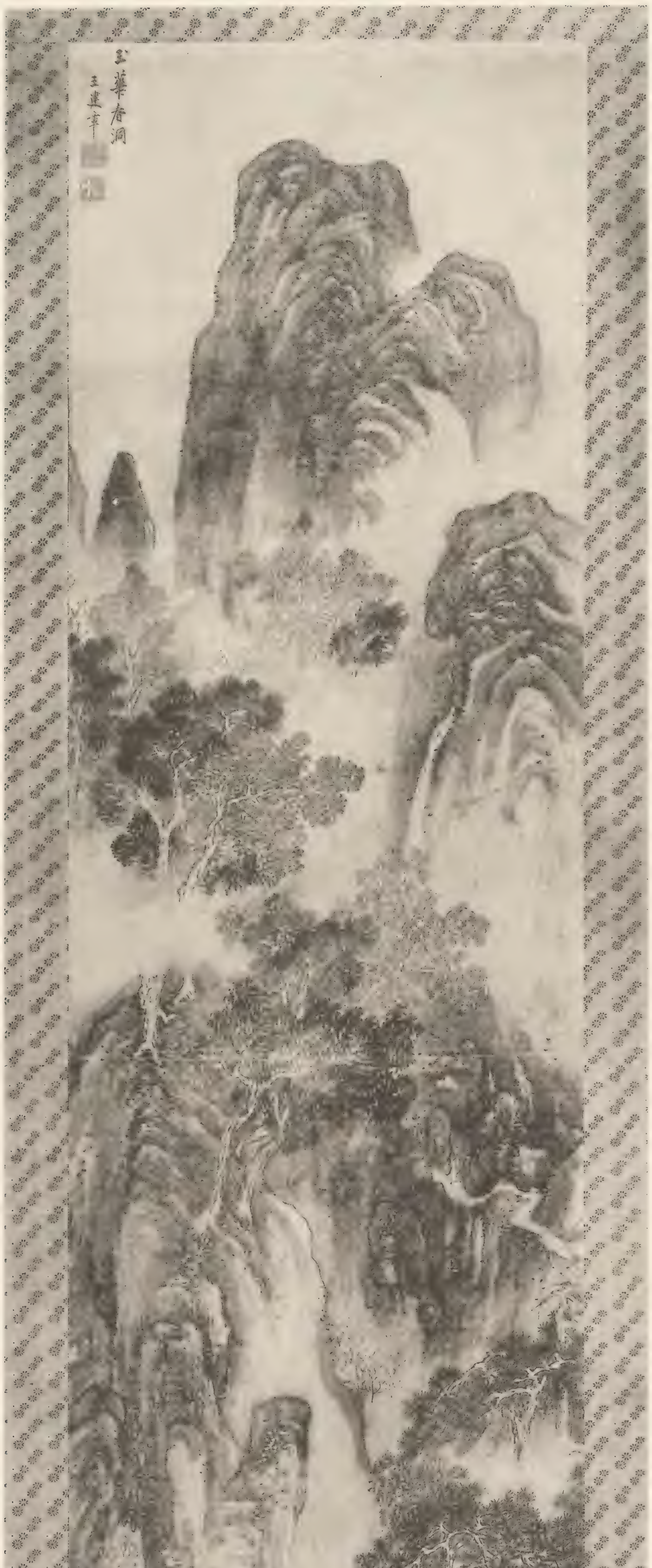
## 同筆 [illegible]泉高松圖

京都 [illegible]君藏

紙本著色 縱五尺一寸二分 横一尺三寸一分

## 王建章筆 王華督祠圖

[illegible] 山内[illegible]君藏


玉華春洞
王建章

丁丑長至日寫
王建章

露冷天〻氣清懷人〻秋〻夜〻永佇
携〻一杖去踏畫碑桐影
王建章畫并題

# 馬一卿筆山莊初秋圖

尾張小鈴谷　盛田久左衛門君藏

金箋淡彩、縦四尺五寸一分横一尺一寸二分

馬一卿字は青邱、秣稜の人なり。山水空濛の致あり。能く淡中に於いて致を取ると稱せらる。本圖の畫風畫傳の言ふ所に似ず。巧整綿密、却りてその長を認む。

# 第五編　清

前代沈石田文徴明以來吳派勃興し、明末に及びて董其昌、陳繼儒等輩出し、盛名藝苑を壓して翰墨場裡の首望と爲り、加ふるに尙南貶北の論畫を唱道して一世を風靡せしかば、淸朝に入りては、南宗獨り盛にして、北宗殆ご澌滅に就きぬ。然れども、前朝の末より國初に亘りて、浙派の後勁と稱せられし藍瑛の在るあり。吳派の論評これを刺りて、識者貴ばずなどゝ貶せしかども、その伎倆は直に派祖戴進の後を紹いで、小仙、平山等の弊風を一洗し、從橫雄健の筆墨を揮ひしかば、その子藍濤箕裘を繼ぎ、その餘藍孟、蘇誼、禹之鼎、吳訥、丁錫、龔振、王巘、胡眉の徒、槪ね吳派に偏せる論畫家の爲に、浙習と嫌はれ、俗惡と評せられながらに、尙その衣鉢を傳へたり。その支那に重ぜられざりしが爲に、藍瑛の蹟は我が國に流傳せるもの夥しく、何れも健實精妍の妙技にして、吳派名手の所作その美却りてこれに及ぶもの稀なり。藍孟、蘇誼等の畫亦これに亞ぐ。吾人は淸朝論畫のこの派に加へたる偏頗の打擊を悲む者なり。

浙派の衰微に反して、吳派の隆盛は前代に過ぎ、淸朝の山水は殆ご皆南宗と謂ふも過言に非ず。而してその畫風は、宋の董巨、元季の四大家等を祖述すと傳へ、所作の款識にもみづから北苑に倣ふと記せるもの頗る多しと雖も、實は大抵明代沈文董陳の末流に屬せざるはなし。されば明末より國初にかけて、曾て董陳二家に深賞せられ、文敏の傳燈、眞源の嫡流、畫苑の領袖と呼ばれし王時敏、及これと並稱せられし王鑑あり。この二家の薰陶に大成し、南北を合して一と爲し、一代の作家、百年來の第一人と謂はれ、曹倦圃、吳梅村等の爲に畫聖とまで名づけられし王翬出でゝ、更にこの派を盛にせり。これ謂はゆる江左の三王にして、淸朝の山水は殆どこれに依りてその典型を定立せられつゝ謂ふべし。かゝる趨勢は實に萬曆、崇禎より康熙、雍正、乾隆を通じて一貫せるものにして、若し政治史に關せずして繪畫史上の年代を區畫せむとならば、萬曆乃至乾隆を以て一時代と爲して通論するを宜しとす。されば吳梅村の謂はゆる畫中九友は、董其昌、王時敏、王鑑、楊文驄、程嘉燧、張學曾、邵彌、邵長蘅、張潤甫にして、明淸の二代に跨り、崇禎末の畫社玉山高隱の十三家（潘徽、歸文休、許滄溟、沈開之、張士美、孟華琳、沈子柳、張炳南、徐孟碩、顧伯厚、許瑞玉、龔慧、姚元暉）も、多くは淸初に亘れる人なるのみならず、王時敏、王鑑の二家ほ、實に斯道開繼の功ありと謂はる。王時敏の子王撰、その徒吳歷、王鑑の徒薛宜、王原祁、通證、上睿、王翬の徒楊晉、徐溶、宋駿業、顧卓、唐俊、金壂學、袁慰祖等、竝にその風を繼ぐ。殊に王原祁は三王に次いで名聲畫苑に高く、門下多士濟々、以て一代を風靡す。華鯤、金明吉、唐岱、王敬銘、黃鼎、趙曉、温儀、曹培、李爲憲、釋覆千、吳應枚、王昱等、皆一時の撰たり。その餘張棟、呂猶龍等亦その風に倣ふ。是等諸家の中、吳歷、黃鼎最も名あり。殊に黃鼎は四王の正傳、正脈の傳燈ご視るべきに似たり。されば歸愚文鈔に、當代畫を以て名ある者五人、惲壽平、吳歷、王原祁、王翬、黃鼎と曰へり。黃鼎の門人方士庶、張宗蒼一時の聞人たり。魏成の畫亦これより出づ。吳歷の門には陸道淮、王者佐、胡節等あり。その名皆著る。その餘、文徵明を慕ふ者項聖謨あり。董其昌の法を紹ぐ者程正葵、查士標、曹岳、趙文度、宋石門、黑壽、普荷等あ

り。この中査士標最も著れ、孫逸、汪之瑞及釋弘仁と共に、海陽の四大家と稱せらる。査士標の門人に何文煌、釋石莊等あり。弘仁の徒に高翔、祝昌あり。新安の畫家多く清閟を宗とするは、弘仁實にこれが先たり。その末流を謂はゆる新安派とす。四大家中、査士標よりも畫名の寧ろ高かりしは孫逸にして、文待詔の後身と謂はれ、蕭雲從と共に、江左の二家と稱せらる。三王に次いで著名の作者なり。蕭雲從は又陳延と共に、畫院の二妙と呼ばれき。

四王、四大家、江左二家、畫院二妙の外、金陵八家あり。龔賢を唱首とし、樊圻、高岑、鄒喆、吳宏、葉欣、胡造、謝蓀を數ふ。龔賢は畫風頗る明の明河に似たり。その徒王槩あり。この中、龔、高、鄒三家の蹟、畫風は必しも同じからず、家々各々特長ありと雖も、竝に南宗に非ざるはなし。又江西派あり。羅牧を以てその祖とす。壯快の健筆別に一風を出せり。呂煥成の蹟これに酷似す。

上記諸家の外、明末清初の交に當り、又周之夔、惲向、釋道濟、方大猷、方以智、莊冏生、顧大申、笪重光、顧豹文、蔡澤、程雲、傅山、葉有年等あり。各々一家を南宗の山水に成せり。道濟は王原祁の爲に江南第一と推稱せられ、就いて學ぶ者甚だ多し。後沈宗騫の畫の惲向に得る所ありけむは、その蹟に依りて考へらる。虎林の章氏、（章谷、章聲等）秣陵の盛氏、その名一時に高し。これよりして以下、康熙、雍正、乾隆、嘉慶の間、朱文震の謂はゆる畫中十哲（高鳳岡、高鳳翰、李世倬、紫愼、張鵬翀、李師中、董邦達、王延格、陳嘉樂、張士英）等よりして外、作者極めて多く、南宗の盛前古に比なし。その中、畫蹟の日東に流傳せるもの少からず。齊しく南宗と謂ふと雖も、そは北宗に對する大別の名にして、家々樣式の變化は千態萬狀なり。道光以後の畫傳は、吾人未だこれを詳にせず。張浦山、馮墨香等の迹を繼ぐべき畫傳の編著出づるを待つのみ。

人物畫は明末に南陳、北崔の兩大家あり。陳洪綬は清初に亘りて、斯道第一の名家と仰がれ、公麟、子昂の妙を兼ね、設色吳生の遺法を學び、高く仇唐の上に在りて、近代人物の冠冕、三百年來この筆墨なしと稱せられ、以て清朝人物畫の開祖たり。雕版世に行はれしもの水滸傳像あり。その子陳字、門人王樹穀、嚴湛、來呂禧等、竝にその法を傳ふ。陳洪綬の外、楊芝、徐人龍、（後顧升、董旭等あり）劉源、（刻本無雙譜あり）金古良、（子可久、可大あり）柳遇、（仇英に亞ぐと稱せらる）徐枚、（柳遇と同里、名を並ぶ）吳求、（仇英風、子吳正あり）周兼、（仇英風）馬相舜、（秘戲圖に長ぜり）王式、（同上）蔡嘉、金農、黃愼、呂學、郭昆、（北方に名あり）王鐄、王國愛、丁元公、葉舟、兪宗禮、吳琳、（諸科に兼長せり）魏向、（羅漢に長ぜり）誠身、（同上）黃堅、游士鳳、王國材等、皆人物、仙佛等を以て名を一時に知らる。是等の中、蔡嘉、金農、黃愼、呂學、兪宗禮の外、人物畫の流傳我が國に多からず。以て諸家の作風を通覽するに由なしと雖も、黃愼、兪宗禮等數家の所作の如きは、以て略清初人物畫風格の概を觀るに足れり。謝彬等の人物は山水中の點景あり。亦以てその一斑を鑒賞することを得べし。

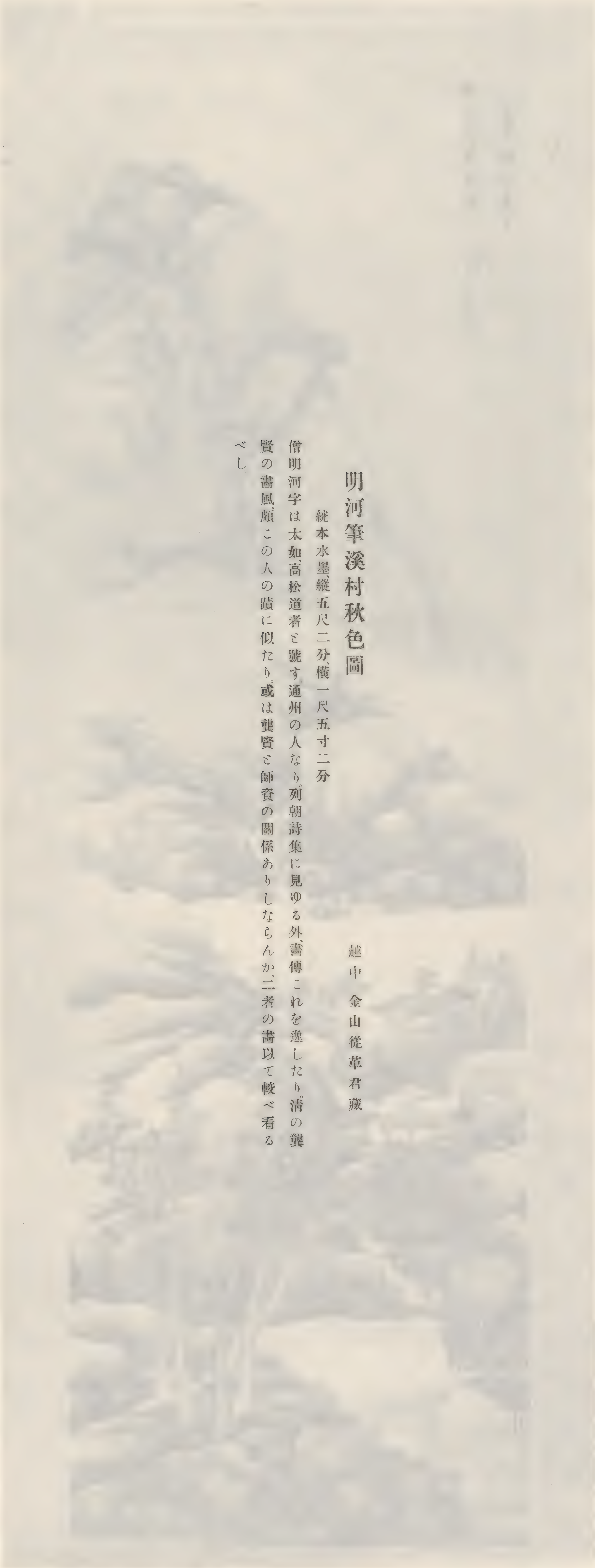
寫照の一派は、多くは明の曾鯨の流に屬す。別にみづから一家を成せるものあり。又西洋畫の影響を受けしものあり。曾鯨の門人には、謝彬、郭鞏、徐易、沈韶、（弟子徐璋あり）劉祥開、張琦、張遠、沈紀、顧企等あり。顧銘、顧見龍亦寫眞の名手たり。その流亞と視るべき者、沈行、濮黃、鮑嘉、（弟子釋性潔あり）兪培、周杲、王僖等あり。その餘、楊芝茂、劉九德、王簡、李岸、夏杲、戴蒼、陸燦、丁皐（その子丁以誠あり）等、亦皆寫照の能手と稱せらる。丁皐は傳眞心領の著あり。曾鯨の法

は墨骨を重じ、墨骨成る後傳彩を施す。傳神墨骨の中に在り。別に江南畫家の傳法あり。淡墨を以て鈎出し、全く粉彩、渲染を以てこれを成す。こは蓋し西洋畫法を取れるなり。明の時、歐洲の人利瑪竇來りて南都正陽門の西營に居り、能く基督教の聖母を畫く。康熈中焦秉貞その法を取りて、新に寫照の一機軸を出せり。門人冷枚あり。又その風を能くせる者に莽鵠及莽鵠の門人金玠等あり。然れども雅賞に入らず。曾鯨の末流も亦漸く俗工に墮ちぬ。

花鳥は前朝の風格を傳へたる外、純沒骨體大いに隆興せり。その前者に屬する者には、孫克宏、（その徒孟永光あり）周銓、（弟周況、周鷺あり）王石、（黃氏體）吳棫、胡鯱奇、（林良、呂紀風）趙之璧、孫杕、虞沅、沈銓等あり。孫克宏、趙之璧、孫杕、虞沅等は、何れも前代周之冕等の風格を紹述せり。沈銓に至りては、勾花點葉體の最も寫生に進めるものにして、巧緻精麗を極む。その畫風日本に傳はりて、近古大いに行はれき。是等明風の餘派及その發展に出でしものゝ外、寧ろ清朝花鳥の代表的流派とも視るべきは、王武、惲壽平、蔣廷錫等の沒骨體なり。共に北宋徐崇嗣を祖述すと云ふと雖も、前にも述べし如く、宋代の謂はゆる沒骨の細勾あるに同じからずして、清朝の沒骨は全然勾勒を用ゐざる純沒骨體なり。王武の畫は王時敏これを稱して、近代寫生率ね畫院の習あるに、獨り勤中神韻生動、妙品中に在りと言ひしほどにて、忘菴一たび出でゝ、學者多くこれを宗とし、黃筌一派終に少しと傳へらる。門人張畫、周禮等あり。既にして惲壽平出で、沒骨の法を大成して時習を一洗し、生面を獨開して寫生の正派たりと稱せらる。海內の學者これを宗とし、忽ち天下に行はれて、終に常洲派の目あり。その甥張子畏、その徒馬扶義、鮑楷、朱纁、邵曾復等、皆その衣鉢を傳へて一時に名あり。蔣廷錫は畫品南田と均しと謂はれし妙手にして、その徒錢元章、鄒元斗、李鱓等ありて、皆師風を傳ふ。李鱓は林良の寫意派をも能くせり。蔣廷錫に次いで鄒一桂あり。南田後稀に見る所と稱せらる。日本にこの風を傳へたる張莘も、亦常州派の一能手なり。

水墨の花竹、梅蘭等、文士の餘業、翰墨中の散技とも稱すべきものには、朱耷、張風、馬頎、（朱耷風）萬个、（朱耷の弟子）魯得之、諸昇、王崿、俞俊、萬其藩、（魯得之以下墨竹家、諸昇の弟子に阮年あり）許友等あり。この中數家の蹟は、流傳日東に少からず。以てこの科に於ける清初の風格を觀るべし。その餘、楊維聰、呂佐の畫魚、尹小埜の畫驢、俞齡の畫馬、周璕の畫龍、高其佩、吳振武、王德晉、高且園、（その徒傅雯、朱倫瀚あり）蔣璋等の指頭畫、亦各〻一時の撰たり。蔣璋の後を指畫の蔣派と云ふ。

清朝にも亦內廷供奉の畫人あり。然れども、宋明の如くこれに階級を授くる等の事は無かりしものゝ如し。諸書の畫人傳中、內廷に供奉せしことの知らる者少からずと雖も、今姑くこれを舉ぐることを略す。論畫は清朝に至りて頗る組織的のものを出せり。芥子園畫傳、芥舟學畫編をその尤とす。その餘、論畫及畫傳の編著甚だ多し。今亦これを詳叙せず。



## 明河筆溪村秋色圖

越中　金山從革君藏

絖本水墨、縱五尺二分橫一尺五寸二分

僧明河字は太如高松道者と號す通州の人なり列朝詩集に見ゆる外書傳これを逸したり清の龔賢の畫風頗この人の蹟に似たり或は龔賢と師資の關係ありしならんか、二者の畫以て較べ看るべし

壬申初冬畫呈
靜翁老先生政
明河

## 藍瑛筆雨後曉烟圖

絹本淡彩、縦六尺二寸二分、横一尺七寸四分

公爵　三條公美君藏

## 同筆荷鄕淸夏圖

絹本著色、縦五尺七寸、横一尺七寸二分

尾張刈安賀　森川勘一郎君藏

## 同筆秋景尋詩圖　畫帖十二幀の一

金箋著色、縦一尺一寸三分、横一尺七分

備中藤戸　星島啓三郎君藏

藍瑛字は田叔、蜨叟と號す。錢塘の人なり。山水宋元を法とし、後みづから一格を成す偉峻老幹、大幅尤長ぜり花鳥梅竹亦共に善し。即浙派の後勁にして、この派戴進に始まり藍瑛に極まると云ふ。淸人多く吳派の末流を好みて浙派を貴ばず。鑒賞の眼識頗明なる張浦山すら宋旭の爲に寃を辨じて、田叔を以て一例抹倒すべからずと言へり。こゝを以てその蹟多く我が國に流傳して頗佳什に富む。これを見るに、その畫風頗南宗の風化を受けて、明代小仙平山等の如き粗獷の病あらず、直に文進と並鑣するに堪へたり。明淸論畫尙南貶北の偏頗、こゝに至りてその弊言ふべからず。吾人は寧吳派多數作者の染擦よりも、眞の藝術上却りて田叔等の作を尊重する者なり。

荷鄉清夏

## 藍孟筆遊山漁樂圖

長崎　杉山德三郎君藏

絹本淡彩、各縱六尺一寸四分、横一尺五寸五分

藍孟字は次公、錢塘の庠生なり山水宋元に倣ひて精妙ならざるなく、運筆甚遒勁ならずと雖、而も邱壑鬆脆、冰梨雪藕の如く、これを見れば唇吻をして俱に爽ならしむと稱せらる今本圖を觀るに、全く藍瑛の風にして浙派末流の一妙手なり

# 蘇誼筆雪山行旅圖

京都　桑名鐵城君藏

絹本著色、縱六尺五寸、橫三尺二寸八分

蘇誼字は仲瞻、杭州の人なり。山水藍氏を摹すと云ふ。これを本圖に觀るも、畫風全く田叔に同じくして、殆んど其壘を摩するの概あり

# 清袁雪筆瓊樓玉亭圖 雪景山水帖八幀の一

京都 桑名鐵城君藏

絹本淡彩、縱一尺八分五厘、橫九寸

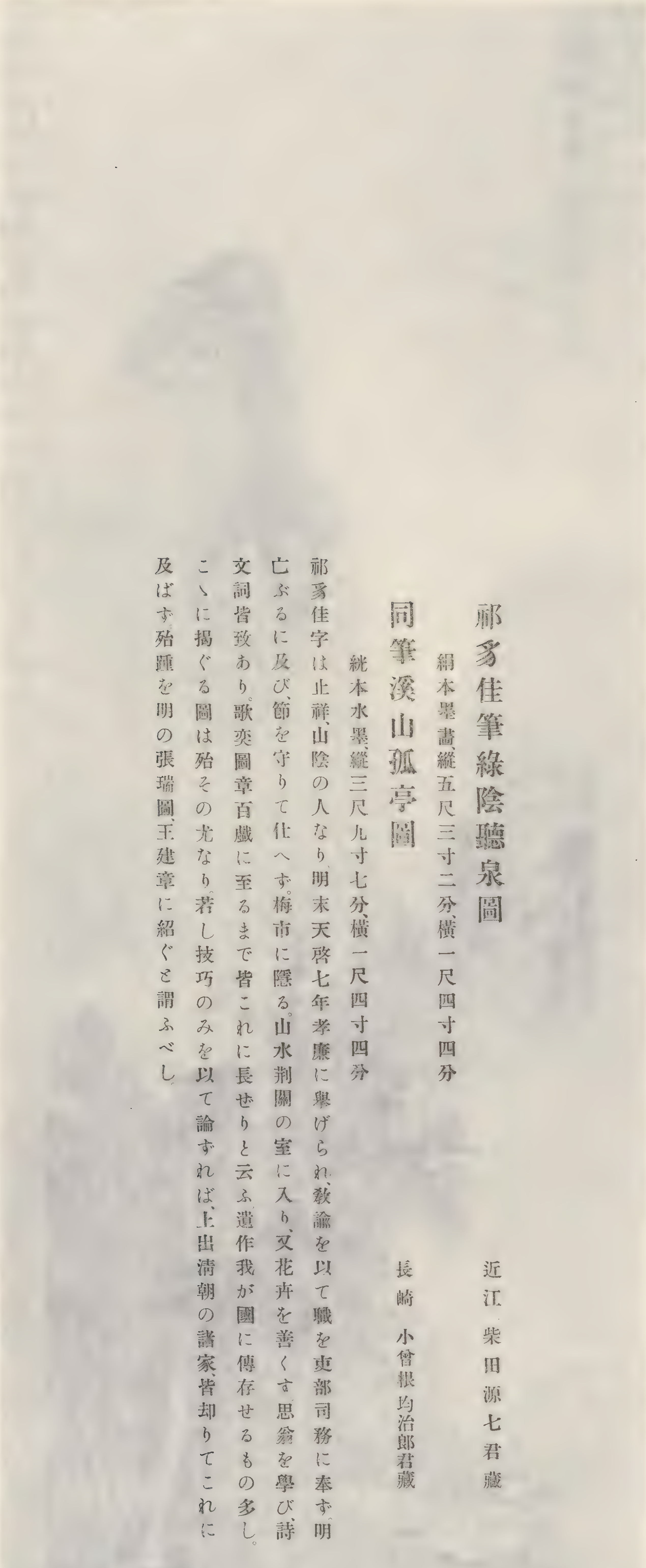
明末清初に當りて北宗の流末に一種特別の畫風あり、即ち袁氏の一家とす畫傳これを逸してその系統及作家の傳記を詳にせずと雖、吾人は近年流傳の畫蹟に依りてそのこれあることを知れり。既に寓目せるものにては、袁耀、袁雪等を以てこの派の最も勝れたる作者とす。こゝに掲ぐるは袁雪の雪景畫冊八頁中の一にして、その樓臺の界畫より樹石の描寫に至るまで、緻巧曲折寧ろ匠氣に滿ちたるが如きは此一派の特調なり。袁雪は畫家傳の諸書に見えざれど、周亮工印人傳中に、「袁臥生雪、吳門人」と記して、吳梅村が曾てその印譜に題せる語を錄し、更に「臥生爲文氏兩葉之甥、故能精文氏學、如是」と曰へり梅村の語中にも「臥生好學深思、精工篆刻、而尤於元朱文究心、吾以爲三橋後當爲獨步」と曰へれば、印人の妙手なるべく、年代も梅村が康熙十年六十三歳にて歿したるより考へて、亦これ明末清初の人なることを知るべし。

# 王時敏筆夏山飛閣圖

男爵　岩崎小彌太君藏

絖本水墨、

王時敏字は遜之、煙客と號す。太倉の人なり。相國文肅公の孫、翰林衡の子なり。資性穎異、淹雅博物、詩文を工にし、書に長じ、尤八分を善くせり。畫に於いて特慧あり。少時董其昌、陳眉公の爲に深賞せられ、その正脈を傳ふ。家もと收藏に富み、更にみづから名蹟を購集し、古畫の閫奥を窮めて、益〻神化に臻る。官奉常に至りしかども、仕進に淡くして筆墨に優遊し、煙霞に嘯詠して、國朝畫苑の領袖と稱せらる。平生才を愛し、その指授を受けし者甚多く、皆名を時に知らる。王石谷の如きは即その尤なり。卒する年八十有九。本圖は明末萬曆二十四年の作にして、韶秀清雅の畫風、品格頗高し。眞に盛名に背かずと謂ふべし。



## 祁豸佳筆綠陰聽泉圖

絹本墨畫、縱五尺三寸二分、横一尺四寸四分

近江　柴田源七君藏

## 同筆溪山孤亭圖

絖本水墨、縱三尺九寸七分、横一尺四寸四分

長崎　小曾根均治郎君藏

祁豸佳字は止祥、山陰の人なり、明末天啓七年孝廉に擧げられ、教諭を以て職を吏部司務に奉ず、明亡ぶるに及び、節を守りて仕へず。梅市に隱る。山水荊關の室に入り、又花卉を善くす、思翁を學び、詩文詞皆致あり。歌奕圖章百戲に至るまで皆これに長せりと云ふ、遺作我が國に傳存せるもの多し。こゝに揭ぐる圖は殆その尤なり、若し技巧のみを以て論ずれば、上出清朝の諸家、皆却りてこれに及ばず、殆踵を明の張瑞圖、王建章に紹ぐと謂ふべし。

# 周之夔筆松澗孤亭圖

大阪 住友吉左衛門君藏

絖本水墨、縱五尺五分、横一尺六寸

周之夔字は章甫、崇禎四年の進士にして、官知州たり畫傳の諸書これを逸したれば、書家として支那に著名ならざる人なれど、その蹟往々我が國に存ず本圖の如き、以てその清秀の技を賞すべし。

丙戌春日寫
周之夔

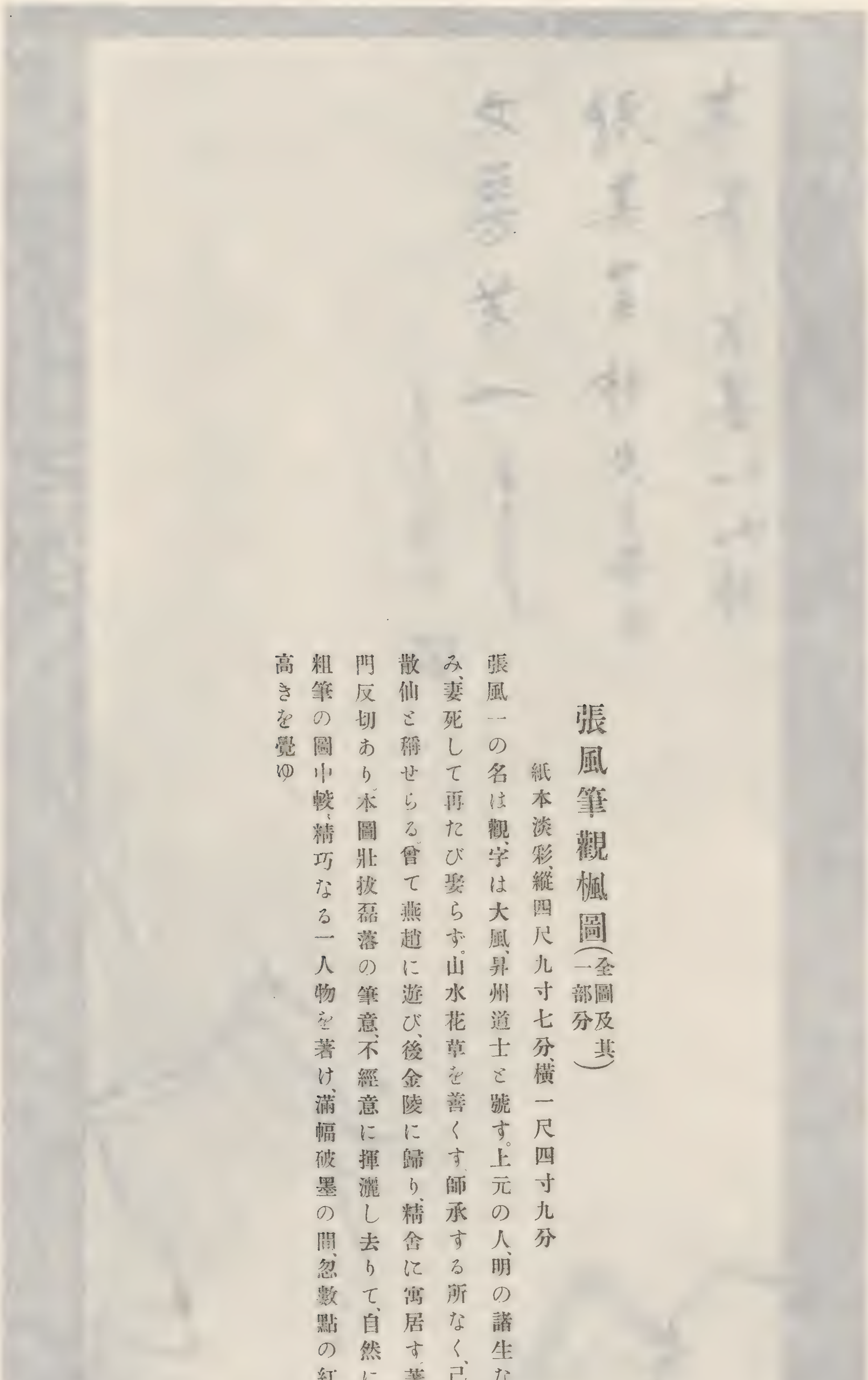
## 惲向筆高松瀑布圖

京都　桑名鐵城君藏

紙本水墨、縱九尺四寸八分橫三尺二寸八分

惲向初名本初字は道生、後名を向と改め、香山と號す、武進の人なり明經博學にして文名あり崇禎の間賢良方正に舉げられ中書舍人を授けられしかども拜せず山水に工なり董巨の二家を法とす懸筆中鋒、骨力圓勁にして用墨濃濕縱橫淋漓、みづから一派を成すと稱せらる。本圖以てその評傳の中れるを觀るべし

臨元鄭僖高松瀑布圖
香山惲向

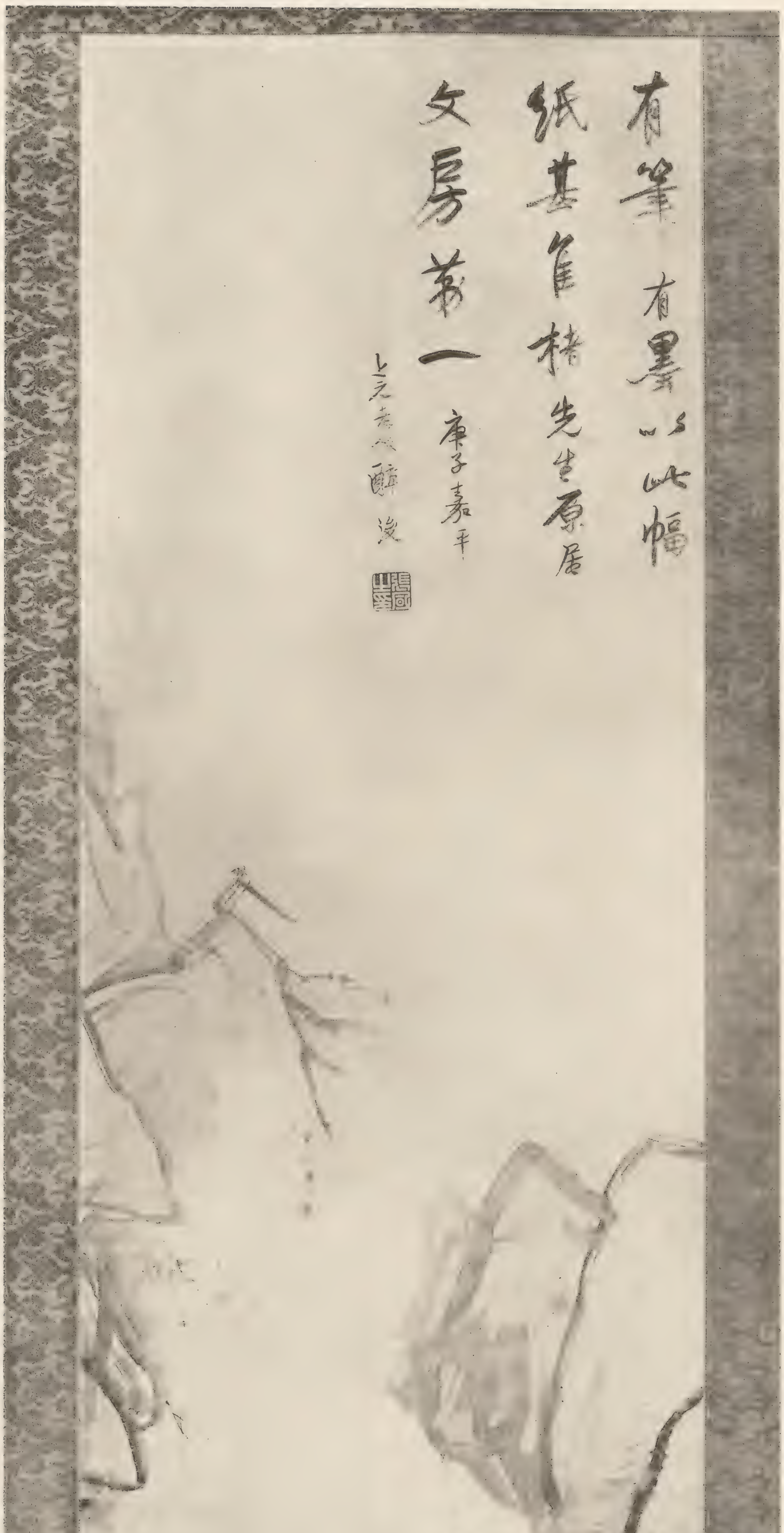


## 張風筆觀楓圖（全圖及其一部分）

越中　金山從革君藏

紙本淡彩、縱四尺九寸七分、橫一尺四寸九分

張風一の名は觀、字は大風、昇州道士と號す。上元の人、明の諸生なり。明亡びて後棄て去りて貧を樂み、妻死して再たび娶らず。山水花草を善くす、師承する所なく、己の意を以てこれを作る。筆墨中の散仙と稱せらる。嘗て燕趙に遊び、後金陵に歸り、精舍に寓居す、著雙鏡菴詩、上藥亭詩餘、楞嚴綱領、一門反切あり。本圖壯拔磊落の筆意、不經意に揮灑し去りて、自然に趣を成せる妙味言外に在り。草略粗筆の圖中較、精巧なる一人物を著け、滿幅破墨の間、忽數點の紅葉を加ふ。何等の奇想ぞ。神韻爲に高きを覺ゆ



# 道濟筆廬山遊覽圖

京都　桑名鐵城君藏

絹本著色、縱六尺九寸三分、橫二尺七分

釋道濟字は石濤、清湘老人、大滌子、苦瓜和尙、瞎尊者等の號あり。明の楚藩の後なり。道行超峻、妙繪絕倫と稱せらる。王麓臺曾て推して江南第一手と爲す。著書語錄あり。こゝに揭ぐるものは即ち其の逸品なり。法悅の餘事に成りて、固より專門家の技にあらざるも、亦おのづから一種の妙あり、韻致また掬すべし。

## 方大猷筆雲岫萬松圖

播磨明石　細谷立齋君藏

絖本淡彩、縱四尺七寸九分、橫一尺六寸六分

方大猷字は歐餘、唵嚂と號す烏程の人なり。崇禎十年の進士にして、淸朝に仕へて官山東巡撫に至る本圖の款識に依りて、萬曆二十五年に生れ、康熙十六年八十一歲の高齡を以て尙神明の衰へざりしことを知る。山水董源を學び、間ふるに倪黃を以てして濕筆多しと云ふ。今本圖を觀るに、禿筆圓渾の妙味、淡墨蒼潤の趣致、竝に極めて高雅なり。これを前出王時敏の蹟に較ぶるに、勝るとも寧劣らずと謂ふべし。

# 張學曾筆山寺綠陰圖

名古屋　淺井喜一君藏

絖本水墨縱六尺五寸三分、橫一尺六寸七分

張學曾字は爾唯、號は約菴、山陰の人なり。吳郡の太守たり幼より書畫を好む。書は蘇長公を學び畫は董北苑に倣ふと云ふ本圖を觀るに淡墨の點染畫趣頗清潤なり

# 莊冏生筆蕭林詩人圖

讃岐高松　向井篤夫君藏

絖本水墨、縱三尺九寸五分、横一尺四寸

莊冏生字は玉驄、澹菴と號す、常州府の人、順治四年の進士なり入りて史館に直す詩、古文を善くし、兼ねて書に長ぜり世祖その書を見てこれを賞し、更に書を進めしめ、旨に稱ひて御前の金盌及衣二襲を賜ふ。右庶子兼侍讀に陞りて卒す。今本圖を觀るに筆意圓渾、墨氣蒼潤、皴皺、樹法並に精嚴にして一點染を苟もせざる概あり。以て全幅穩穆の調趣を成せり。これ蓋澹菴一家の技風ならむ、

## 林祁筆花卉圖

絖本水墨縦四尺九寸、横一尺六寸

京都　市田理八君藏

林祁は明清畫傳の諸書に所見なし故を以てその傳記及年暦を知らずと雖、その蹟往々我國に傳存するを觀るに、蓋亦文士の餘技にして、李復堂等に似たる沒骨の花卉を能くせる者、年代は清朝に屬する人ならむ、輕淡逸雅の畫法、巧ならずして却りて趣致の多きを賞すべしとす

に屬する人なるも、畫旅逸興の畫法巧なるを以て却りて趣致の多きを賞すべしとす。
存するを聞くに、畫法はもとより濃淡に於て未だ全く世に行はるゝ俗畫一派の作を排せる者多し、清朝
林氏は明清畫傳の畫法に通曉せしを以てその傳記及年譜を知ることを得、その畫法を窺ふに偏

絹本著色　竪四尺九寸　横一尺六寸

# 林鶴算花卉圖

京都　市田彌八君藏

750
T12f

Tajima Shiichi
Toyō bijutsu taikan

明治四十四年七月一日印刷
明治四十四年七月五日發行

（東洋美術大觀第十一冊奥附）

不許複製

編輯兼發行者　東京市京橋區新肴町十三番地　株式會社審美書院代表者　田島志一

寫眞版印刷者　株式會社審美書院寫眞版部主任　中山音次郎

木版印刷者　株式會社審美書院木版部第一工場主任　三井藤三郎

活版印刷者　株式會社審美書院活版部主任　小松副一

印刷兼發行所　東京市京橋區新肴町十三番地　株式會社審美書院　電話京橋長三五五番

7455

發行所兼印刷所

東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社 審美書院
電話京橋(四)三三三番

凸版印刷者 株式會社審美書院凸版部主任 小松調一

木版印刷者 株式會社審美書院木版部第一工場主任 三井藤三郎

寫眞版印刷者 株式會社審美書院寫眞版部主任 中山青太郎

編輯兼發行者 東京市京橋區新肴町十三番地 株式會社審美書院代表者 田島志一

不許複製

明治四十四年七月五日發行
明治四十四年七月一日印刷
(東洋美術大觀第十一冊奥附)

SMITHSONIAN INSTITUTION LIBRARIES
3 9088 01652 2690